
Re:Angel/Machinery feather

白黒ねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:Angel/Machinery feather

【Nコード】

N55220

【作者名】

白黒ねこ

【あらすじ】

退屈な日常に絶望していた一人の少年。
夢も希望も持てず、ただ漫然と過ぎ行く日々。
故に願ってしまった。
腐敗した日常を殺し、新生する非日常を。
その正体が、その代償が、どんなモノかも知らずに…。

end / 0 (前書き)

初めての投稿です。

厨二色が強いとは思いますが、生暖かく見守ってくだされば幸いです。

どうぞ、よろしくお願いします。

end / 0

end / 0

? / ?

ものすごく幼稚で、オレの人格を疑われかねない、かの単語で例えるのは気が引けるが、しかし。

残念ながらオレは、超能力者でもアンドロイドでも、ましてや、普通の人間たる限界スペック保持者、すなわち天才ですらない。

すなわち、一般人にすぎないオレの知識では起こった事実をそれ以外の単語では説明できない。

出オチと言われそうだが、仕方がない。

出オチであろうと、話さなければ先に進まない。

言うよ？

せーの。

魔法！

.....。

...こほん。

我ながら陳腐すぎて涙が出る。

魔法！の次に（泣）をつけて“魔法！（泣）”にしようとも思っ

たが、本当に出オチになってしまうので自粛した。

さて。

魔法。

言わずもがな超常現象の代表例の一つ。

抹消され、抹殺され、淘汰された神代の奇跡。

現代社会において。

あつたらしい。

あつたかどうか疑わしい。

存在を確認するのも馬鹿馬鹿しい。

信じるなどおこがましい。

子供の夢であり、もはや漫画やアニメ、小説の中でさえ瀕死の、
陳腐な王道。

あまりにも弱く、虚弱で、脆弱な幻想。

それが世の中の正しい知識であり、常識の中の正義であり、普通の認識だ。

それは、オレにしたって例外じゃない。

人間誰しも、体験した事以外には確信を持てない。

けれど、自国から出た事のない人間が、当たり前前に外国の存在を信じるように。

宇宙に出たことのない人間が、地球が球体である事を疑わないように。

魔法の、……いや、超状の存在を願ってしまった。

そして、認識してしまった。

体験という絶対的な認識の縛りから逃れることができなくなってしまった。

曖昧で不鮮明な、誰もが知る確か幻想から。

万物は認識されて始めて意味を持つ。否、意味の無いものなどありえない。ある、からには全てが意味を孕む。

故に、曖昧に感じるオレの狭い世界は、救いのない完全だった。

余計な事象など、つけ入る隙などなく。付加されるモノは、全て余分な不純物。

そもそもにして。

全ての過ちは。

全ての間違いは。

全ての罪悪は。

誰も信じないことで意味を得ていた“無色の現象”に。

“無”にカタチを与えてしまったのは。

どうしようもなく愚かな、弱いオレ自身だった。

さて、前置きが長くなってしまった。

いい加減に始めるとしよう。

機械の翼を持つ“一つ”の天使の物語を。

A n g e l / s t a r t / 1 (前書き)

第二話、というか第一話です(汗)

A n g e l / s t a r t / 1

A n g e l / s t a r t / 1
1 0 / 4

秋。

全国的にド平日であるこの日。

オレは新たに小説を購入すべく、学校帰りに近所の書店へと向かっていた。

特別、読みたい本があるわけでも、読書家でも、本の虫でもない。ただ、ふらりと。

気紛れに。

目的を果たすべく無目的に。

ぶつちゃけ、朝のニュースで見た“読書の秋”なる単語にのせられただけである。

とはいえ、好きか嫌いかで言えば読書は好きだ。

読書に限らず、映画でも、ゲームでもいい。

一時しのぎにすぎなくとも、一時の逃避にすぎなくとも。

創作された世界には夢がある。

その世界の住人にはなれないけれど、このありふれた腐敗した世界よりは輝いて見える。

モチベーションは低く、ゆったりと自転車のペダルを漕ぐ。

書店に着くまでにはいささか時間もあるし、冒頭からいきなりカットもなんなので軽くオレという人間について触れておこうと思う。野郎のプロフィールになんぞ興味を持つ輩がいるとも思えないが、まあそこは我慢してほしい。

新見望。

のぞむ、と書いてのぞみ。

特に目立った才能も、秀でた能力もないただの平凡な、平々凡々な。それだけが特徴とともいえる高校生男子である。

残念ながら語るべきドラマ溢れる過去や、とかいいつつ実はずの展開もありはしないので、ここからは個人的な思想。というか、ただの愚痴。

オレは明日、いや、なんなら今この瞬間にでも死んでも構わないと考えている。

年齢×歳にして人生に飽きている。

それを特別な考えだなんて思わない。

オレくらいの歳なら、あるいはいつだって誰だって、漫然と感じている極論中の極論。

それを、無意識に忘れようとすることで、オレ達は生きていける。人生は楽しい。

今は辛くとも、きっと明るい未来が待っている。

そうに決まってる。そうに違いない。

逆に言えば、そんな根拠のない希望に縋らないとオレ達は生きていけない。

ズバリ、人生は退屈だ。

既に理由もなく明日に希望を抱く時期は卒業した。意味もなく毎日が楽しいと感じるには経験を重ねすぎた。

オレのように、やりたいことも、夢も、ましてや目先の目標すら定まらない人間には、なおのこと。

たとえ世界の終わりを望もうと、明日は必ずやって来る。

そんな強迫観念にも似た、絶望的に襲いくる認識から逃れられない。

とはいえ、解決策は簡単だ。

××してしまえばいい。

ただ、それを実行する勇気も、度胸もないだけ。

死んでも悔いは残らないが、死にたいわけでもない。

永遠に満たされない世界は地獄と同意。

乾いて乾いて、いずれは枯渴し、朽ち果てる。

ガキだと言われようと、オレは退屈な日常をぶち壊す幻想を信じていたい。超常を願っていたい。

例えば、未来人。

例えば、宇宙人。

例えば、妖怪。

例えばそう、魔法とかね。

「……はは」

我ながら馬鹿馬鹿しくて笑ってしまった。

「こういうの、なんていうんだっけかな」

ピーターパンシンドローム、だっただろうか。どうにもうる覚えだ。

大人になりたくない。

ずっと子供でいたい。

けれど、どうしたって超常の存在などありえない。

ありのままの現実を、この世界がこんなにも退屈で、つまらないものだと、受け入れるのが、怖い。

それがわかってしまったら、生きているのは辛いだけだろう。

だから、ただ漫然と生きていることに理由があるのなら、ただ諦めきれないだけ、なのだろう。

確証を得ないようにしながら。

あきらめずに、いられるようにしながら。

創作された幻想に逃避して、伽藍の人形のように、ただ生きている。

「……はあ」

ため息をついて空を見る。

空は厚い黒雲が覆っていた。

やべ、傘は学校に置きっぱなしだ。今から戻っても間に合わないか。

「雨が降り出す前に帰らないと、ずぶ濡れになるな、これは」
ほんの少し、ペダルを漕ぐ足に力を込めた。

大通りの交差点に出る。ここを過ぎれば書店は目と鼻の先だ。
と、そこで見知った顔を見つけた。

ベリーショートの髪に片耳ピアス。ワイシャツの上には学校指定
のブレザーではなく私服のパーカーを羽織っている。

あの特徴的な後姿は間違いなく。

「よう、前川」

前川剣。

“けん”と書いて“つるぎ”。

相変わらず、すげえ名前だ。

女の子なのに剣。

オレも人の事は言えないか。

共に、現代の親が名付けた黒歴史確定のネーミングである。

違いがあるとすれば、オレは完全に名前負けで、前川は名前通り
という点だろう。

前川は全国でもトップ3に入る剣道の腕前、らしい。以前、全校
集会で校長がそんなことを言っていたような、いなかったような。
そんなわけで、前川は学校でもきつての有名な人である。

加えて、五人に一人は振り返るであらう端正な、もしくは中性的
な顔つき。

一見、非の打ち所のない感じではあるが、かわいいとか、学園の
アイドル（？）と称するには、剣呑な目つきが台無しにしていた。
ちなみに、オレとの関係はクラスメートで、

「誰だ、オマエ」

……まあ、そんな感じだ。

追記、この男勝りな口調もアイドルといえない要因だろうか。

「新見だ。新見望。同じクラスだろ」

「……………」

前川は本当に思い当たらない、といった顔で首を傾げる。
傷つくなあ。

三点リーダーの数だけ傷つくなあ。

影が薄い自覚はあるが、半年以上同じクラスなのになあ。

漫画だったらオレの頭上にガビン！とか出てるに違いない。

まあ、知名度で言ったら、学校の有名人（もしかしたら、全国的有名人）であるところの前川と、学生Aがせいぜいのオレでは比べるべくもないのだが。

「まあ、オマエが誰でもいいや。なんか用か」

「いや、特別そういうわけじゃないけど」

オレの態度に不快感を覚えたのか、前川はむっと顔を歪めた。あれ、不穏な空気。オレ、なんか不味い事したか？

「なんだよ、オマエ。用もないのに話しかけてきたのか」

「ああ、まあ」

ただ、姿を見かけたから話しかけただけ。結果として前川はオレのことなど知らなかったが、クラスメートを無視する理由もないだろう。

前川は、はあ、と大仰にため息をついた。

剣呑な目つきが益々不快感に歪む。

「なら、話はこれでおしまいだな。こっちは、他人と話すことなんてないよ。話相手がほしけりや他を当たれ」

そう言って、前川は前を向きなおした。

沈黙が流れる。

それは、交友関係など築けそうもない明確な拒絶だった。
ふうむ。

他人か。

他人ね。

そうだな。まったくもって前川の言うとおりだ。
世知辛いけれど、ほんの少しだけ悲しいけれど、ただのクラスメートに過ぎないオレは、どうしようもなく他人なのだから。

どうでもいい話ではあるが、冒頭から自分批判が多すぎて泣きたくなってきたオレである。

「……はあ」

なんか凹むな、色々。

顔を上げると、信号が赤から青へ移行すべく、黄信号が点滅していた。

おお、助かった。まさしく渡りに船だ。

拒絶されたての相手との信号待ちが、これほどの苦行だとは知らなかった。

まあ、それも残り数秒の我慢だ。

信号が青へと変われば、前川はオレをおいてさっさと歩き出すだろう。オレは前川に追いつかないようにゆっくりと横断歩道を渡ればいい。

それで、終わり。

明日からは、今日あったことなど忘れて、今までどおりのクラスメートに。

朝に挨拶を交わす程度の他人に戻る。

ただ、それだけのこと。そこに哀愁などありはしない。

なんとなく前川の後姿から目を背ける。

その時、

ギリギリのタイミングで左折しようとするトラックに気づいた。

信号は黄から赤へ。

前川がオレを振り切るように、フライング気味に、横断歩道へ、

踏み、出し、た。

ブレーキを踏む運転手。

クラクションの音も。タイヤがアスファルトを削る音も。依然として、前川には届かない。

音の伝達速度をもつてしてもまだ遅い。

コンマ1秒の世界に人体は反応できはしない。

驚きに強直する身体。

なんだこれ？

なんだこの急展開！？

なんの脈絡もねえよ！！！？

運命つてのは、本当にこっちの都合などお構いなしに。

暴力のように襲いくるもののなか。

（全ての命に）

差別なく。

（理不尽にも）

こんな、数分前に会ったばかりの少女にさえ。

（残酷なほど）

平等に。

ああ、それにしても。

1秒がやけに、長い。

足は地面に縫い付けられたように動かない。

くどいようだが、オレは一般人である。

それは運動神経にしたって同様に、体育の成績も3から4を言ったり来たりする程度だ。

だから、目前の惨劇を防ぐことなどできはしない。

オレはそんな超人的な反射神経など持ち合わせていない。

前川は当たり前にトラックに轢かれ、屍は打ち捨てられたゴミのように路上に転がるだろう。

オレは無力感に打ちひしがれながらも、他人に同情すらできず、

どうしようもない事故だった、と自身に言い聞かせる。

事故の責任など自分にはないのだと。

その重さに耐え切れないが故に。

……自身の弱さに、
 またも、絶望するのか。

! ! ! ! !

1秒後の確定された未来図。

イレギュラーなどありはしない。

なのに。

だから。

問題は。

[illegible]

前川が飛び出したことなどではなく。

運動神経だの反射神経だのに関わりなく。

未来の後悔などでは断じてなく。

そう、問題は。

前川の頭上で大鎌を振り上げた、奇怪な機械の翼を持った髑髏の
飯面。

「う、おあああああああああああ！」

弾かれるように手を伸ばす。

何故、そうしたのかわからない。

前川を助けたかったのは事実だが、そういうことじゃない。確信をもって言える。

これは、不可避の事故だったはずだ。

人に1秒を延長させることなどではしないのだから。

動けた事に説明がつかない。

まったく理由がわからない。

意味不明極まりない。

ただ必死に、前川のフードをひつつかみ、投げ飛ばす勢いで引っ張った。

反動で尻餅をつく。

顔を上げる。

トラックはその場に静止していた。

まるで、その場所に、はじめから停車していたかのように。

前川は声すらあげず。

トラックの運転手はおるか、誰一人として反応すらしない。

オレにいたっては安堵もできない。

鼓動が速すぎて胸が痛い。

「な」

んだ、アレは。

大鎌を振り切った体制のまま、髑髏は赤い視線をこちらに向ける。いや、正確には微動だにしていない。

視線の先などオレの錯覚にすぎない。

陽炎のように揺らめいて、幽鬼のように存在は不確かだというのに。

アレは、確かに、そこにある。

とびきりの悪夢で。

失笑すらない冗談だ。

オレの頭が狂ってなどおらず、いまだ正しく動作しているのならば。

あの姿はまるで。

あの姿はまさに。

死神、そのものではないのか。

幽鬼は、ゆらりと大鎌を水平に構え。

「！」

悲鳴よりもなお速く。

オレの首を薙ぎ払うべく突進してきた。

0秒後の死を幻視する。

屍餅をついたまま、情けなく横に転がった。

空を斬る大鎌。

怖い。

ただ怖い。

脳の許容量を遥かに超えた恐怖に、表すべき言葉などない。

わけもなく、オレはあの影が、怖い。

「うわあああああああああああ！」

全力でその場から駆け出した。

その場に残された前川や、見知らぬ他人が、あの幽鬼に襲われる可能性すら度外視して。

どう考えても最悪の選択、だっただろう。

オレは、身勝手に前川を助けておきながら。

自分の命恋しさに、これを見捨てたのだから。

今思えば、オレが裁かれる理由など、これだけで十分だったのだ。

Angel/escape/2

Angel/escape/2

10/4

がむしゃらに出鱈目に、全力で走り続けて。

どこをどう走ったのか、どれくらいの間走り続けたのかさえわからないまま、それでも走って。

気がつけば学校に戻ってきていた。

身体は全身汗だくなのに、歯はがちがちと鳴り、震えが止まらない。

呼吸は荒く、吐き出す息は白い。

何キロも走ったはずなのに、体温は低下し続ける。

幻の寒さに必死に耐える。

恐い。恐い。恐い。

人体が温度を感じる機能は、なにも皮膚を通したものだけではない。

赤い色は暖かいイメージ。青い色は寒いイメージ。

視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚。五感全てが緻密に連動し、温度を感じ取る。

脳からの認識に対し、体が反応する。

逆に言えば、脳からの認識から逃れる術はない。

目に見えぬ、イメージにすぎない恐怖こそが、この寒さの原因だった。

「 、 、 」

二度目の尻餅について、声にならない呼吸を繰り返す。

「 痛ッ! 」

全身が鈍く痛む。

見ると、右腕からは血が滲んで、制服は土で汚れて所々破れていた。

気が動転していたせいか、あまり憶えていないが、何度か人にぶつかったり、盛大に転んだりしたような気がする。

「……とにかく、保健室、行かなきゃ、な……」

朦朧とした頭を抱えて、ふらふらと歩き出す。

人に会える。

ただ、それだけの事実が胸を満たすようだった。

きつと、いつもみたいにボーっとして、あるはずもない幻覚。いや、悪夢を見てしまったんだろう。

文字通りの、悪い、夢を。

はて、しかし保健室の先生にはなんと説明すればいいのだろう。幻覚を見たあげく、クラスメートの女子を引っ張り倒して、逃げ出した拳句に、スッ転びまくりました。

……おお。

なんつーか、まさしく奇人変人そのものだ。

明日から前川に向けられるであろう、ゴミを見るような視線を想像すると、いっそ不登校にでもなってしまいたくなる。

なんて、な。

はは。

おかしいな、まるで、笑うことができない。

気分はどん底のまま歩いて、ようやく辿り着いた保健室の扉に手をかけた。

「……失礼します」

はたして先生はそこにいた。

机に座り、なにか仕事の途中なのか、こちらに背を向けたままだ。反応は、ない。

なんだろう、よほど集中しているのだろうか。

いつもなら柔和に微笑んで迎えてくれるはず、なのに。

喉が渴く。

なんなら不機嫌でも構わない。

いつそのこと無視されていたとしたって、今は安心できる。

ただ振り返ってくれさえすれば、この悪夢の終わりに確証が持てる、のに。

「あの、先生？　ちょっと怪我しちゃったんで手当てを」

先生は振り返らない。

冷水が背を伝っていく。

「……先生？」

それを否定したくて。

先生の肩に手をかけた。

どさりと砂袋を落としたような音をたてて、先生は床に崩れ落ちた。

目を、開いたままで。

……ああ、よくできた人形だ。

これではまるで、つい先ほどまで血が通っていたみたいじゃないか。

瞬間、壁に掛けられた時計を見て、冷水だった汗が、ついに凍りついたような、錯覚を感じ、た。

乱暴にドアを開け放ち、再び廊下へ走り出した。

秒針は動いていなかった。

走る。走る。走る。

すれ違う学校に残った数少ない生徒も。

楽しそうに会話と笑顔を止めた友人達も。

途中に寄った職員室でのことも。

全て頭から追い出して、ひたすら走った。

悪夢は、終わっていない。

なにかがおかしい。

なにもかもがおかしい。

まるで、オレ一人を置き去りにして世界が狂ってしまったかのよう。

どうして、こんなことに。

誰か、誰でもいい、教えてくれ。

助けを求める？

誰に？

あのマネキン達以外に、この世界の、誰に。

ああ、そうか。オレは取り残されたのか。この、終わらない1秒に。

だから、きつと1秒前なら、あるいは助かったのかもしれない。

きつと彼らは人間のままで。

そして、前川は助からなくて。

どの道、どん詰まり。

あるいは、前川を助けようとしたことがそもそもの間違いだったのだろうか。

とっさの判断であれ、青臭い偽善であれ。見捨てるぐらいなら、助けるべきではなかった。

結果として、オレは傍観者から、加害者へ変わってしまった。

せめて無事であってほしいと、都合のいい、根拠もない願望にすることがことしか許されない。

錆び付いて悲鳴じみた音をたてて、鉄製の扉を開く。

屋上。

無人にして無風。

「なんだよ、これ」

オレは確かに未知の存在に憧れてはいたけれど。

オレが望んだものは。

オレが焦がれた世界は。

オレが夢見た超状は。

こんな、誰かを犠牲にする、地獄のようなものなんかじゃなかったはず、なのに。

真ん中辺りまで歩いて、とうとう膝をついた。

「！」

ただならぬ気配。

絶対的な存在感を感じて。

確信を再認するために、ゆっくりと振り返った。

そこには、そもその始まりにして、全ての終わり。

他でもない。オレ自身が望んだ。望んでしまった終末の形。

鋼の翼を纏い、大鎌を構えた死神の姿。

……ああ。

終わった。

チェックメイト。完全に詰みだ。

どう考えても、ここからの逆転劇などありえない。

ゲームオーバーだ。

馬鹿だな、ホント。

クラスメートを見捨てて、散々逃げ回って、自分の願いに失望して、錯乱した拳句、よりもよって、こんな逃げ場のない袋小路に行き着いた。

立ち上がり、近づく終わりから逃げようと後ずさる。

はは、なんだこれ。

一步。

この期に及んで、まだ生きようとしてる、なんて。

二歩。

なにが、明日死んでも構わない、だ。

三歩。

なにも知らないくせに、世界は狭いと。

四歩。

世の中などつまらないと決めつけて。

五歩。

自分では何もしなかったくせに。

六歩。

他力本願で叶う、幻想を抱いて。

七歩。ガシャン。

その果てが、この末路か。

「たく、ない」

悔しくて、悔しくて。なにが悔しいのかもわからなくなるほど悔しくて。

「にたく、ない」

馬鹿みたいに。

フェンスが爆ぜる。

みっともなく。

背中から、空に舞う。

時が止まった、降るはずのない雨にも似た大粒の涙を流しながら。

「死にたく、ない」

愚かにも。

景色が逆さに流れてゆく。

そんな、身勝手な言葉を。

「死にたく、ない！」

ただ、懸命に、叫び

『汝が願い、確かに聞き届けた』

そんな、聞こえるはずのない声を幻聴した。

瞬間、目を潰すほどの光が天より一閃した。

音速などスローモーションであるかの如く。

厚い雲をぶち抜いて、降り注ぐ光の矢は豪雨となり屋上もろとも死神を薙ぎ払う。

豪雨どころか滝と化した大質量に飲み込まれ、塵一つなく、存在の痕跡すら残さず、まるではじめからそうであったかのように、死神は姿を消した。

「……まったく。そういうひねた所は変わりませんね、貴方は」

声に宿るのは呆れか、安堵か。

声の主はオレを抱きとめ、静かに呟く。

「はじめから素直になっていれば、こんな事にもならなかったでしょうに」

その姿はまさに。

白では比較にすらならない。

白銀でもまだ、届かない。

放出される雷を纏い、夕日の朱さえ拒絶する絶対色である“白”の化身。

そうして。

その奇跡は、まるで。

魔法のように。

「守護天使の盟約に従い、全ての迷える子等に救済を」

死神と対を成す機械の翼を持った、異形の天使は光臨した。

空には静寂だけが残り、暗雲は残っていなかった。

Angel/Re:angel/3 (前書き)

upするにあたっての加筆・修正作業が終わりません……orz
という、わけで第三章です。

やっぱり、絵がないと容姿が伝わりづらいですね (汗)
知り合いに絵描きがないもので… (泣)

ともあれ、100アクセス、ありがとうございます。本当に読んで
くださるだけで嬉しいです。これからも頑張ります！

Angel/Re:angel/3

Angel/Re:angel/3

10/4

すっかり言い忘れていた、というよりは言う必要性を感じていなかったただけなのだが、そろそろ、オレの身のうち話をしたほうがいいように思う。

現在、新見家宅はオレの一人暮らしである。

といつても、両親は健在だし、この歳で勘当もされてなどいない。複雑な事情などなく、ただ単に田舎から県外の高校に進学したために寮住まいなのだ。

地元の高校を選んでもよかったのだが、当時のオレは今以上に刺激に飢えていたために、見飽きた地元よりも新天地を選んだ。

両親から反対はなかった。日々訳もなく不貞腐れていく息子の姿に呆れ返っていたのかもしれない。

今の環境での更生が望めないのならば、未開の地でのショック療法、という結論に至ったのかもしれない、と考えるのはいくらなんでも悲観思想が過ぎるだろうか。

どの道、オレに両親の真意はわからない。

結果として。

結果として、新鮮だったのは始めの二ヶ月余りだけで、一年も過ぎれば元通りの退屈に捕らわれていたわけであるが。

そうして、オレは間違いを犯し。
気がつけば。

見慣れた学生寮で目を覚ました。

「……ん、え？」

キョロキョロと周りを見渡す。

うん、間違いなくオレの部屋だ。

っていうか、オレはいつ帰って、いつ寝たんだろう。

今日って何日、今何時？

睡眠時間がわからないため、時間感覚がひどく曖昧だ。

ポケットに入れたままの、携帯電話を開く。

時刻は十月四日、午後十九時過ぎ。

あれ、オレはなんで制服のままで寝てたんだろう。

頭が痛い。

なにやら、ひどい悪夢を見ていたような。

うーん。

実にメダパニ。

まあ、そうか。

そうだよな。

夢か。

あんなの夢に決まってる。

いやはや、ここまで読み進めてきた読者の皆様には言葉もない。
という夢を見たんだ。

的なね。

俗に言う夢オチってやつだ。

はあ、そう思うとひどく疲れてしまった。

さて、風呂にでも入って、着替えてから寝なおそう、と身を起こして、

「って、そんなわけ」

「は？」

「ありますか、このゴミ虫ご主人がーッ！」

「うごっ！！？？」

真横からツツコミを受けて、ベッドから転がり落ちた。

ちなみに、チョップとかビンタとか生易しいものではなく、幕内ばりのいいボディブローだった。

……うごごごう。

やべえ、マジ呼吸できねえ。

人体急所である鳩尾を的確に捉えてきやがった。言い直そう、幕内ばりのいい内臓打ちだった。グラップラー的漫画表現だったら泡でも吐いていたやもしれぬ。

「なに、今までの経緯とか私の存在意義とか色々なかったことにして、『さあ、明日からまた楽しい毎日を続けよう、完！』、みたいにもノローグうってやがりますか、このクソ虫ご主人は！」

色々ツツコミが追いつかない。

……クソ虫ご主人って。

地味にゴミからグレードダウンしてるし。

だいたい、そんなモノローグうったら、オレのキャラが崩壊するわ。

新見望は決して、毎日に絶望こそすれ、希望などもってはいなかった。

「あと、“生易しい”を二回連続で“生野菜”と変換ミスした筆者に触れてはなりません！ええ、なりませんとも！決して！生野菜！」

「いや、そこについては、かすってすらいねえよ！」

さすがにどうか、とは思ったけどね。

「むしろ今、お前がとどめをさした上に、死体に塩を塗りこんだよ！急にギャグパートなんて聞いてねえし！つか誰！？ああもう、なんか全てが台無しだよー！」

台無しだよー！

無しだよー！

しだよー！

だよー！

よー！

「つかみはバッチリですか？」

「疑いようもなく、バッチリだ！」

今度こそ、という夢を見たんだ。

「ハッ！？」

なぜかベッド脇の床で目を覚ました。

「おはようございます」

傍らには、というかベッドの上には、しれつ、とした顔でオレを見下ろす、見慣れない真白い少女。

向けられた視線が、意味もなくゴミ虫ご主人とか、クソ虫ご主人を見るようなものに感じるのは気のせいだろうか。

まあ、たぶん気のせいだ。うん。

そんな斬新な単語、あつてたまるか。

埃を払いつつ立ち上がる。

目前に正座する、人のカタチを持ちながら、人ならざる白銀の少女。

顔立ちから察する年齢は、オレと同じくらいか、上下2歳ほど。

全身に纏う、鎧甲冑。

大分小型化しているが、背中に確かに存在する鋼の翼。
さて。

オレは訊かねばならない。

確認しなければならぬ。

「で、キミはいつたいどちら様で」

……しまった。

帰ったら、たまたま家にいた、暇を持て余したカーチャンが招き入れたセールスマンのおっさんに訊くような口調になってしまった。
うーん。

どうにもギャグパート（という夢を見たんだ）の影響から抜け出せない。

いかな。

このままいくとずるずると、引つ張ってしまいそうだ。
シリアスに戻るなら今しかない。

「……こほん。言い間違えた」

オレが言つべきことは。

オレが言わなくてはならないことは。

そんなことじゃないはずだ。

「ありがとう。キミに、助けられた」
深く、頭を下げた。

「礼には及びません。貴方に感謝すべき対象があるとすれば、それは貴方自身の心と、その幸運以外ない。……それより、まず場所を変えましょうか。募る話もありますし」

そう言つて少女は立ち上がり、居間へ歩き出した。

まあ、こちらとしてもその方がありがたい。

ベッドに正座した少女と、頭を下げたオレ、という図は、どう見ても痴情の纏れにしか見えない。

居間。

会話再開。

「さっきのこと」

「はい？」

「礼には及ばない、って。どういう意味なんだ」

オレは確かに目の前の少女に、命を助けられた。あの地獄と化した屋上で、九死に一生を得た。

「どういう意味もなにも、言葉どおりの意味です。私は貴方を守護すべく、天より光臨した。私はそのためにあり、そうすべき存在なのです。結果として貴方の命を救ったのも、個人的な事情や、ましてや同情でもない。私はただ、古の盟約に従ったのみです。ご主人が気に病むことはありませんよ」

???

よくはわからないが、気にしなくてもいい、ということらしい。
んん？

一つ疑問が浮かぶ。

すごく自分勝手な話で、口にするのも憚られるが。

この少女がオレを助けるために来たというのなら、なにもあんなギリギリのタイミングで現れなくてもよかったのではないか。

「そうですね。しかし、ご主人。死んでも構わない、などと考える人間に、救いの扉は決して開きません。救済は、それを真に願うものにこそ与えられるべきものだからです」

少女は見透かしたように。いや、真実、見透かしていたのだろう。しれっ、とそんなことを言った。

「……………」

ぐうの音もない。

それは、オレが長年内包してきた歪んだ願望。

“求めよ。さらば与えられん”

求めるどころか、背を向けてきたオレに、救いなどあるはずがなかったのだ。

「…あー、まあとりあえず、自己紹介をしよう。他にも訊きたいことは色々あるけど、そうしないと始まらない」

順序が逆になってしまったが、今からでも遅くはないだろう。

「オレは新見望。まあ、普通の高校生だよ」

我ながら簡潔すぎる気がするが、今必要なのは最低限の個人情報だけでかまわない。

「新見様、ですね。畏まりました。では、私は変わらず、ご主人と

お呼びすることにしましょう」

「……うーん、できれば名前で呼んでほしい、かな」

ご主人、なんて呼び慣れないし、なんともくすぐったいし。

「だいたい、なんでご主人、なんだ」

「そういう、盟約ですので。守る側と守られる側が対等の立場では、示しがつきません」

「？」

イマイチ、よく分からなかったが、彼女に事情があるのなら、オレが慣れればいいだけの話か。

「それで、キミの名前は？」

「……」

少女は困ったように視線を逸らした。

「……申し訳ありませんが、私に貴方達人間が使うような“名前”としての呼称はありません」

呼称が、ない？

「夕刻、貴方を襲ったアレ同様、私にも呼称はありません。あったところで意味がない。……そうですね、例えば、台風や大雪に名前などないでしょう。現象としての名称はあっても、単一としての個称はない」

先程と同じく、畳の上にちょこんと正座した少女は表情を変えずに答える。

理解が追いつかない。

オレの頭が悪いのか。

あるいは想像力がたりないのか。

「現象？単一としての個称？」

いやでもキミは

「

と、言いかけて。

『夕刻、貴方を襲ったアレ同様、私にも呼称はありません』

アレと、同様？

あの影を。

あの幽鬼を。

あの髑髏面を。

オレは何と認識したのかを思い出した。
「そうですね。それでも強いて言うのなら。」

オレの認識が正しく、壊れたままならば。

この、目の前の少女は。

「その現象の名前つてのは、まさか」

それは、まさに。

「貴方達で言うところの、天使に分類カテゴリされる存在です」

まあそうだろうな。

驚きはなく、あっさりと納得する。

天使。

彼の者は天上にありて、迷える魂を導く救済の徒。

名が示す通り、天の使いであり。

人間と酷似した姿を持ちながら、一線を画す上位存在。

その象徴にして、人間との最大の相違点。

背中から生えた翼と、頭上の天輪。

まさか機械の翼だったとは驚きだが、今更そんなことはどうでも
いいように思えた。

そう。

自己紹介など必要なかった。

彼女が天使である証明に言葉など不要。

この、脳に直接叩きつけられた、強固な認識だけで十分。

ああ、なるほど。

だから、現象なのか。

彼女が台風や大雪で例えた理由がわかった。

誰しも、暴風雨の中、今日はいいい天気だなあ、などとは思っまい。

逃れようのない、絶対認識。

故に、現象。

「ご主人同様、我々を認識できる他の異能者達からすれば、正確には、現象ではなく“化象”、らしいですけどね」

「化象？」

耳慣れない単語に首を傾げる。

「知らずとも無理はありません。あまり有名な言葉でもありませんから。」

現象でありながら、形を持たず。架空の存在でありながら、現実を侵食する幻想。自然現象や物理現象と異なり、幸運や不運に始まり、魔法や魔物など、在るとされながらも現代科学で解明できない現象を、総じて“化象”と呼ぶ」

見えない救済。

天使という名の化象。

それこそが、自分なのだと彼女は言い切った。

「ああいや。オレが言いたいのはそういうことじゃないよ」

再認できたのはありがたいが、キミが天使であることなど。意識を失う直前。

あの、夕焼けの空の中。

とつくにわかつていたのだから。

「そうですか。では何かの問題が」

あるのですか、と首を傾げる少女。

その仕草はなかなか可愛かったが、それはさておき。

「問題は、あるようなないような。キミがどうしようもなく天使っていう現象なのはわかってるけどさ、ニッケネームっていうか、呼び名かな、が欲しいんだ。まさかいちいち、おい天使！、なんて呼びづらいだろ」

「そうですか。ご主人がそう言うのであれば構いません。どうぞお好きにお呼びください。ええ、なんでしたら、おい天使！、でも構いませんよ」

しれっ、と。

少し不機嫌そうに言う天使さん（仮）。

気のせいかな、つーん、なんて効果音が聞こえる。

「……………」

……あー。

そこは引つ張らないでほしかったなあ。

ま、いいや。

しかし、呼び名か。

自分で提案しといてなんだけど、ネーミングセンス（も）ないんだよなあ、オレ。

とはいえ、名前が決まらなないと話が進めづらいし。

少女を上から下まで眺める。

白銀の髪。

大きな瞳。

高めの鼻。

均整のとれた顔立ち。

体型は鎧に隠れて殆どわからないが、辛うじてわかる足の長さ。その特徴のどれもがどの人種にも該当すまい。

そもそもにして、

「……………」

百の言葉も。千の言葉も不要。

彼女の外見を説明するなら、ただ美しい、それだけで十分。完成された完全。

故に思う。これは天使だからこそ許されたヒトガタなのだろう。死神とは違った意味で、直視することが難しい。

完成された造形は、自分が欠陥品なのだと否応なく認識させる。オレ達人間は皆、未熟で不完全だ。

個人差はあれど、誰もがそうだからこそ、未熟な自分を許してあげられる。

だから、完璧な人間などあつてはならないのだ。

もし、そんな人間がいれば、誰しも自分に希望などいだけなくなる。

それはともかく。

顔立ちから体型まで、どう見ても、日本人って感じではないんだよね。

漢字の名前ではさすがに違和感がある。

「スリーサイズは教えませんよ」

「いや、訊いてねえよ！」

気になるけど。

いきなり、そんなセクハラ発言するか！

気にはなるけどな！

「嘘です。私の肢体を舐めまわすように見て。目つきがいやらしいです」

「そんな目つきしてねえから！仮に！仮にだよ！？今のお前に欲情したら、オレ、鎧フェチってことになるだろうが！？」

断じて、そんな性癖もってない。

金属萌えとか病気すぎる。

「ご主人くらいの年頃の男子は、女子と見れば見境なく盛っているのではないのですか」

「今すぐ認識を改めると共に、全国の高校生男子に謝れ！」

なんだ、この天使。

話が先に進まねえ。

そうだなあ。

外国人っぽく、適当にカタカナを繋いで。

「……あー、フ、…ファ、ファル、ナ、ネ？」

「私に聞かないでください」
だよね。

「ファルネイリア」

…おお！

我ながら、すげえ名前っぽい。

「………」
しかし、ファルネイリア（仮）は無表情のままフリーズしていた。

沈黙、長いよ。

ん？カーテンが揺れている。

窓は締め切っているし、季節柄、冷暖房器具もつけていないのが、どこからか風が。

と、

「……ふふ。偶然とは、恐ろしい。……まさか、いえ、よりもよって創造を司る神とは。私は……天使」

そよ風から風へ。

風から強風へ。

強風から暴風へ。

弱・中・強。

「……く、こんな名前負けがありましたようか」

今まで小型化していた機械の翼がよきによき巨大化していく。

なんか、放電しながら、ぶおおおおおおん！なんて音出してるし！

ここまできて表情が変わってないのが怖すぎる。

「……しかし、ご主人が、どうしてもと、言うのなら、甘んじて」

「わー！なしなし！今のなし！わかった！オレが悪かった！だから、羽！お願いだから、羽をしまえー！部屋！部屋が吹っ飛ぶー！」

必死に柱にしがみついて耐える。

言ってて、部屋どこるか建物自体が吹っ飛びそうだと、他人事のように思った。

離陸直前の音速機のバーニア付近って、きっとこんな感じ。

「そうですか。ご主人がそう言うのなら」
しれっ、と。

天使は羽を引っ込めた。

ぜえぜえと肩で息をするオレ。

室内はさながら台風被災地のような有様だった。

ってワイ！

天使背後の畳が消炭になってんぞ！

隣の部屋とか大丈夫かよ、これ。

既に手遅れな気もするけど。

苦情がくるわ！

「その点のご心配なく。天使に限らず、化象と呼ばれるモノは多かれ少なかれそこにあるだけで、世界に影響を与えてしまふ。これを必要最小限に抑えるため、我々が存在するこの空間、現在はこの部屋ですね、は通常の空間とは隔離されています。そうすることで、世界は“化象”を容認しているわけです」

「……あー、つまり？」

「世はこともなし。ちよつと散らかったのはご主人の部屋だけ。ということです」

「……………」

最低な気遣いだ。

ちつとも嬉しくない。

しかも、今コイツ、この惨状を“ちよつと散らかった”とか言いやがったぞ。

いや、寮崩壊の危機が回避されたのは喜ぶべきところなのだろうか。

……なんか、複雑な気分だ。
ともかく。

ファルネイリア、という名前が禁句なのは（実感を伴って）わかった。

彼女は正座を崩すことなく、ふむ、と頷いて。

「そうですね。では、ユダ」

「え」

一瞬、ほんの一瞬だけ、何かに耐えるような表情を浮かべる。

「ユダと、お呼びください」

ユダ。

キリストに背き、死に追いやった。

そして、皮肉にも神性を証明してしまった裏切りの徒。

あまりにも有名な、裏切りの象徴。

そんな、天使にとっては侮辱でしかないであろう名を。

彼女は

しれつ、と

自身と呼んだ。

A n g e l / a n g e l s w o r d / 4 (前書き)

仕事が忙しくて更新が遅れてしまいました(汗)
申し訳ありません… o r z

Angel / angel sword / 4

Angel / angel sword / 4
10 / 4

さて、だいぶ脱線したが、いい加減話を戻そう。

「どうしてオレに、お前達が見える。あの時間が止まった世界は、なんだ。」

この十数年の人生の中で、霊能力であれ、超能力であれ、なんであれ。そんな力がないことなど、とうにわかりきっている。

だとすれば、死神を認識できたことにも、こうして天使と向き合えるようになったことにも、なにかきっかけ、あるいは理由が必要なはずだ。

日常から非日常へ移行するトリガーがあつたはずなのだ。

「貴方になぜ、私達が見えるのかは分かりません。」

本来、私達は見えてはならない、カタチの無い救済であり、カタチの無い悲劇であるべきだからです。回避も防御も。自由意志さえ許されない。受け入れることしかできない、運命とも称される現象。それが我々の正しい在り方。

ですが、どういうわけか、貴方はそれに抗った。何故、と問われれば、それはこちらが聞きたいくらいです」

「……………」

「見える、認識できる、ということはそれに干渉する力を持つ、ということ。」

生まれながらのものか、後天的なものか。どちらにせよ、ご主人

からは今も特別なものは感じない。間違いなく普通の人間です」

だからこそ、異常事態。

ありえないイレギュラー。

「とにかく今は、答えの出ない問答に時間を割くべきではないでしょう。話を変えます、ご主人」

「……ああ」

「時が停止した世界について説明する前に、本題に触れておきましようか。それこそが私がここにいる理由でもあるのですから」

そうか、天使が救済の具現なら、その行動には必ず救うべき対象が必要なはずだ。

この場合は、オレ、か。

ユダは一度目を閉じて、再び口を開く。

「結論から言つて、貴方はまだ死神に狙われています」

「……まだ、狙われている」

あの悪夢は、終わつてなど、いない。

「時が停止した世界は、イレギュラーな事態が発生した場合に生ずる、一種の結界です。規定に定められた運命。それが何らかの形で失敗、もしくは妨害された場合に発生し、これを修正するための時の狭間。問題の根本が排除されるか、結界を作り出した根本が消えることでしか解除されることはない」

結界。

外界と内界を遮断する、特殊空間。

なるほど、な。

あの世界は、他人の干渉を防止するための、運命に背いた罪人を裁く処刑場つてわけか。

あの時、死ぬ運命が前川だったにせよ、オレだったにせよ。

それは回避されてしまった。

それである死神は、原因であるオレを殺し、事態を立て直そうとしたのか。

……いや、まで。

ユダの説明を全て鵜呑みにするには一つ疑問が残る。

部屋の時計に目をやる。

針は、確かに時を刻んでいる。

……結界は、機能していない。

あの時。

薄れる意識が捉えた光景。

茜色の景色の中。

死神はユダが放ったであろう光の雨に撃たれ、跡形もなく消滅したはずだ。

「いいえ、ご主人。死神は消滅などしていません。あれは一時的に足止めしたにすぎない。もう、忘れ たのですか。我々は、天使、死神という名の“現象”なのですよ」

太陽が沈んでも、また昇るように。

雨が止んでも、いずれまた降り出すように。

また動き出し、オレを襲う。

「なら、またユダが倒したらどうなる。一時的な足止めでも、いや、足止めが可能なのなら」

事態は解決しないにしても、少なくとも平行線を保てるのではないか。

「確かにご主人の言うことも一理あります。けれど、それにも限度がある。

ご主人、アレと私は同種ではありますが、同一に見えますか」

「それは……」

違う。

ユダと死神には決定的かつ明確な違いがある。

ユダからは人間と見間違うほどの、確固たる自意識を。

一人格を確かに感じる。

けれど。アレからは。

あの死神からは。

何も、感じなかった。

ただ“死”という言葉だけを内包したような。
空虚な風船のような。

人間味など望むべくもない、まさしく“現象”そのものだった。

「その認識で正解です、ご主人。」

私達天使は人間と酷似した外見を持つが故に、内面も同様、人間に近い精神、心を持つ。

ですが、アレは“死”という結末だけを運ぶ一種の記号。規定に忠実に動作するプログラムのようなものです」

「……プログラム」

秩序を守る、法の番人。

機械仕掛けの自律人形。

ならば、意思を感じない視線も。

死を司りながらも、放たれることのない殺意にも、説明がつく。

「プログラム、というよりはコンピュータウイルスでしょうか。」

失敗から経験し、学び、進化する、不滅の永久機関。

夕刻、やむをえない状況だったとはいえ、ヤツを手にかけたのは失策でした。次に相見えた時、前回と同じようにはいかないでしょう」

時間は稼げてても、状況はひたすら悪化の一途を辿り、やがてユダにも手に負えなくなるときが来る。

その時が、終わりだ。

ならば。

「教えてくれ、ユダ。オレは……どうすればいい」

ユダは、オレを守護するために光臨した、と言った。

ならば、何か解決策がなければおかしい。

ユダは一度目を閉じて。

「単刀直入に言います。私では死神を打破することはできない。

アレは貴方が招いたモノだ。私にできるのは、ただ道を示すことのみ。自らの運命に立ち向かえるのは、自分しかない。

ならば、答えは一つです。

助かる道は、貴方自身が死神を打破する以外ありません」
神託を告げた。

……目眩がする。

アレに、立ち向かえ？

あの、直視すらできない、目を背けなければ自我を保つ事が許されない絶対的な恐怖に立ち向かう。

そんなこと、

「……できない」

できるわけがない。

臆病な自分を弁護する訳じゃないけれど、これは勇気とか度胸とか、そういう問題じゃない。

たとえ何か策があったところで同じ。

人間に限らず、命あるものはアレには打ち勝てない。

運命は不可避でなければならぬ。

それは、この世界の掟であり、必然だ。

死を退ける命など、決してあつてはならないのだから。

そうでなくては、摂理が破綻してしまう。辻褄が合わなくなる。

向き合った時点で、終わりなのだ。

だから、

「……それは、できない」

情けなさに、ユダの顔が見れない。

俯いて、言葉を待つことしかできない。

「そうですか。貴方は命を諦めて、死を享受する、と」

「……それは、」

答えがない。

あの時、あれだけ無様に足掻いておきながら、都合よく生にしがみつこうとしておきながら。

今度は、死に逃避するのか。

……また、逃げ出すのか。

「……………」

Angel/sword angel/5 (前書き)

祝 アクセス200件突破!!

マジ、嬉しいです(泣)

何度でも言います!読んでくださる人がいる、というだけで幸せです!!

これからも、モチベーション全開で頑張ります!!

Angel / sword angel / 5

Angel / sword angel / 5
10 / 4

オレが助けようとして

オレが見捨てた少女。

前川剣が、そこにいた。

「
無事だった。

生きていてくれた。

その安堵が胸を打つ。

零れそうになる涙を堪えるのに必死で、言葉が、ない。

「
……」
前川は夕刻と変わらない剣呑な目つきでオレを睨む。
いや、変わらず、というのは間違いだ。

「
……」
前回と比べ、恨みのようなものがこもっているからか、迫力が三割増しになっている。

わかりやすく言えば、あきらかに怒っていた。

とはいえ、いつまでも気圧されたまま、つつ立っている訳にもい
かない。

ユダ同様、前川にも言わなくてはならない言葉が

あったはずだ、と思った矢先、

「オマエなあ！」

前川に胸倉をつかまれた。

「勝手に人を助けておいて、いつの間にか消えてんじゃねえよ！」

……あー、え？

「いきなり背中引つ張られたと、驚いて振り返ってみりゃ消えてやがるだ！どこのインベーターを撃退した超猿人だデメエは」

まあ、前川の例えはともかく。

そこでようやく思い至った。

そうか、ユダが死神を消滅させるまで、世界の時は停止していたのだ。

「いや、それは……」

なんて説明すべきか迷っていると、

「まあ、いい」

一通り文句を言っただけでスッキリしたのか。

前川は俺のシャツを放し、フン、なんて言っただけで腕を組んだ。なんだろう。

前川は文句を言ったただけに、わざわざオレを訪ねたのだろうか。

「んなワケあるかッ」

「うがッ!？」

すねにローキックをくらった。

……うおおおおお、超いてえ。

腕を組んでいたから油断していたが、まさか蹴りがくるとは。

お前、剣道部員じゃねえのかよ!?(?)

ユダが言葉攻めなのに対し、前川は物理的なツッコミを入れてくるらしい。

……にしても、すごく嬉しくない二択だな。

文句の前に胸倉をつかまれたことといい、口より先に手が出るタイプだった。

出たのは足だけだな(キリッ)

うつむ。

これ以上余計なことを言っただけで、更なるツッコミが飛んできそうだし、すねをさすりつつ立ち上がり、話を変える。

「しかし前川、よくオレの家がわかったな」

知り合い以上、友達未満〃他人な関係だったのだ。

前川は、オレの住所どころか連絡先すら知らないはずである。

「おいおい、あまりあたしをなめんなよ」

前川はフン、と胸を反らす。

「オマエの住所ごときググって一発だ」

まじか！？

検索に引つかかんのか、オレの個人情報！？

「まあ、オマエに限らず、大体の人間の個人情報はネット上に流出してけどな」

「……やなこと知った」

ありえないとは言いい切れなだけで、リアルに凹むな、それ。

事実として前川に住所を割り出されたわけだし。

知らないほうが幸せな現代社会の闇だった。

なまじ、本当の世界の闇に直面している身としてはダメージがかい。

冒頭から凹みすぎて、もはやU字と化しているやもしれぬ。

「……オマエさあ、あんまり真に受けんなよ。なんで、冗談ひとつでガチ凹みされてんだよ、あたし」

ああ、冗談だったのか。

そらそつだよな。

だよな？

ちよつと疑心暗鬼気味なオレである。

ふうむ。

ことの外、会話が弾んでいるな。

しかし、コイツ冗談とか言うキャラだったのか。

前川とまともに会話するなんて、初めてなんで今一キャラが掴めない。

いや、そもそもオレは前川が誰かと会話しているところなど、この半年間一度も見たことがない。

学校での前川は、窓際の席でずっと外を眺めている、そんな印象

があつた。

そしてその印象はおそらく、オレに限らず、クラスの間、もしくは学校全体の人間が感じていること。それは前川が所属する剣道部内ですら例外ではあるまい。

あまり進んで人と関わらず。

誰かが話しかけても、

「ああ」「へえ」「そう」「だから？」

それで終わり。

実にわかりやすい、明確な拒絶。

孤独でなく、孤高。

学校随一の有名人でありながら、いなくなろうと誰も気に留めない、矛盾を孕んだ偶像。

テレビの中の有名人が映写されたような、儚げな存在。

こんなことがなければ、こんな突飛なことがなければ、高校生活の中で前川と会話する機会など終ぞ訪れない。それは経験則からの事実に思えた。

つと、なんの話だったか。

思わず話が脱線してしまった。

「オマエがMだという話だ」

「断じて違う！」

「はっ、あたしに蹴りを喰らってニヤけてたヤツがよく言っぜ」

「……………」

言葉に詰まるオレ。

「ああ、そうか。オレン家の住所の話か」

ようやく元の路線近くまできた。残念ながら、まだ正しい路線ではないが。

前川はチツ、とか舌打ちしてるし。

……………恐ろしい。

この女、まだオレを弄り足りないというのか。

「学校」

「は？」

簡潔に言い切る前川。

学校がどうしたのだろう。いくらなんでも単語一個で連想するのはハードルが高い。

「だから、学校だよ学校。職員室言つて、適当に事情を話せば住所くらい教えてもらえる」

「ああ、なるほど」

だから、学校、ね。

なんにせよオレの個人情報だだ漏れな事になんか変わらないような気がするの、まあ、この際考えないようにしておこう。

うーむ。日中の時点で薄々感じてはいたが、どうも前川は口下手っぽい。

口下手、というより楽しい会話に慣れていないような、そんな感じを受ける。

感覚の話なんで、イマイチ説明しづらいが。

それでも、学校での前川しか知らないオレでも。

学校の外で、あるいはオレの知らない友達の前で、前川が楽しそうに話す姿をどうしても想像できなかった。

「……………」

と、前川は唐突に押し黙ってしまった。

視線が所在なさげにキョロキョロと動く。

今日一日で前川の新しい側面を見ることができて素直に眼福なん、であえて沈黙を傍観することにする。

「でいッ！」

「いてえッ!？」

しまった。思わず顔に出てしまった。

本日二発目のキック。今度は膝が脇腹にヒット。

再び蹲るオレ。その、頭を、

「ふんッ」

とか言つて。踏みつけられた。

……おいおい、そこまでするかい。

驚きでツツコミを入れ損ねたよ。

「随分と楽しそうじゃねえかよ、オイ。人がキョドってんのがそんなに珍しいか」

「前川限定なら、かなり」

「正直なのは褒めてやるけどよ、お前のは愚直って言う、んだ、よッ！」

「あうっ！おうっ！」

ぐりぐりから、げしげしへ。

痛い痛い！あと、地面が硬い！冷たい！！

我ながら嘘がつけないにも程がある。

まさか、オレの人生の中で女性に頭を踏まれる機会があるうとは、しかも十代後半で。

たった一日の間にひどい墮ちようだ。すでに墮ちるところまで墮ちて地面にめり込んでる気さえしてきた。文字通り凹んできた。

いやしかし、それを認めたら色々終わりの気がする。具体的にはこの光景をユダに見られたら終わる。

「つたく、ホントにふざけたヤロウだ」

戦闘民族の王子みたいなことを言いながら、足を退ける前川。

「愚直、か。……あたしも、人のコトは言えねえか」

前川はがしがし、と頭を搔く。

そのまま背を向けて、

「ありがとな、オマエに、助けられた」

そんな、馬鹿な事を言った。

それは、オレがユダに宛てた言葉と一字一句同じもの。

けれど違う。それは違うんだ、前川。

送り手の意図が同じであろうと、受け手に、オレに受け手たる資格なんてないんだ。

オレには、お前に礼を言われる権利なんて、本当は合わせる顔すらない。

「……違う。オレは、ただ」

理由すらわからない衝動に動かされて、そして、我が身可愛さに、お前を見捨てた。

前者には意思がない。天使の救済同様、善意はなく、助けた、という結果があっただけだ。ただの偶然。

オレの罪悪感の正体は、後者。

オレは自らの意思で、前川を見捨てた。

オレは自らの意思で、前川を殺しかけた。

助かった。無事だった。そんなものは結果論だ。

そんなもの、たまたま運がよかっただけ。

なにか一つでも歯車が狂えば、事態は最悪の方向へ進んでいた。

ああ、だから、死神の正体はオレの罪なのかもしれない。

見捨てたということは、殺したとイコールなのだから。

殺人は許されない罪だ。理由は是非もない。なら、…オレが裁かれるのは、必然、なのか。

「オマエがどういいうつもりで助けてくれたかは知らないし、訊く気もない」

言葉を発せないオレに構わず、前川は続ける。

「あたしには、助けられた、その事実だけで十分。どんな理由があれ、身を挺して誰かを助けるなんて、あたしにはできない。自分を嫌ってる人間なんて、なおのこと」

「……………」

「ありがとう。無事で、よかった」

その場に取り残された前川の心境など想像に難くない。

あくまで。あくまで想像でしかないが。

オレより身体能力が上の前川のことだ、自身が助からないことは、トラックが迫っていると気づいた時点でわかっていたのだろう。

諦めに染まる思考回路。生きようとする生態反射も間に合わない。ピリオドを待つだけの決定事項。

それを助けられた。あろうことが、つい先ほど自分が拒絶した相

手に。

安堵と共に訪れる混乱、戸惑い。

けれど、振り返った先には、誰もいない。

死体が転がっていないかったのは、唯一の救いだったのかもしれない。

オレが逆の立場でも思う。

理屈も、理由も、意味もわからないが、助けた相手が消えた原因は、自分にある。

自分一人が巻き込まれるはずの事故に、他社を巻きこんでしまった、と。

前川も不安だった。自分を助けた相手が、突如として消えた。不安で不安で。急いで学校まで戻り、相手の住所を調べた。もしかしたら、先に電話をかけたのかもしれない。

全てはそう、安否を確かめるために。助けてくれた、その礼を言える信じて。

「自転車、下の駐輪場に置いといたから。あとでちゃんと鍵掛けておけよ」

用は済んだと、前川はじゃあな、と別れを告げて歩き出した。

「前川！」

それ呼び止めた。

「ん」

前川は振り返らず、顔だけを僅かにこちらへ向ける。

『無事で、よかった』

それは、

「心配かけて、ごめん」

オレが言つべき言葉だったはずだ。

「ありがとう、前川。本当に、無事でよかった」

「……ああ。じゃ、また明日学校で」

そうして。

手をひらひらさせながら、今度こそ前川は立ち去った。

「……ああ、また、明日」

言葉は既に宛先に届かない。

前川と、そして自分に向けた言葉は、オレの胸にだけ残る。

「長く話し込んでいましたが、なるほど、昼間の少女でしたか」
リビングでオレ達のやりとりを聞いていたらしいユダが玄関に顔を出す。

「ご主人、これだけは伝えておきます。貴方が死神に敗れば、ヤツの次の標的は彼女です。今は想定外に発生した抑止力を排除すべく、貴方の命を狙っていますが、それが終われば、必然、鎌を矛先は本来の標的に戻る。」

ご主人、貴方が命を諦めると言うのなら、ともに彼女の命も諦めなさい」

言葉は厳しいけれど、確かな気遣いを感じる優しい警告。

分かってる。

分かってるよ、ユダ。

だから、誓おう。

今度こそ、逃げ出さない。

一度は助けた以上、オレは最後まで前川を守り通す。

『また、明日』

ただの社交辞令でしかなくとも、その言葉に応えたのならば、諦めることなどできない。

ただ、明日を迎えるために。

「ユダ」

「はい、ご主人」

「一度は諦めておいて、虫のいい話なのは承知の上で、頼む。オレに力を貸してくれ。オレに、死神を倒す術を、教えてくれ」

せめてもの誠意として、深く頭を下げる。

「頭をあげてください。是非ありません。もとより、私は私自身の意志で貴方の味方をしているのですから」

子供の成長を見守るような、温かく、柔らかい微笑。

「ふふ、僅かな間にいい顔をするようになりましたね」

その、初めて見たユダの笑顔が不意打ちすぎて、

「やはり、男の子ですね」

なんてからかわれても、反論などできなかった。

A n g e l / t w i l i g h t b u f f o o n / 6 (前書き)

やたらルビが多くなってしまいましたが、たまたまです(汗)

Angel/twilight buffoon/6

Angel/twilight buffoon/6

10/4

現代社会において、眠らない街、という表現はもはや都会に限ったものではなくなった。

ほんの少し住宅地を離れただけで、“町”は“街”へと意味を変える。

一日を通して、人間という名の燃料が尽きることはない機能は、エンジン不眠不休で活動を続ける。

こうして、深夜を控えた時間でさえ、人工の灯りは消えることはない。

都会とは言えずとも、大きな駅を拠点とした繁華街では、もはや語るべくもない日常の光景。

それは、オレの住む地方都市も例外ではなかった。

前川と別れ、一通りの状況確認と作戦会議を終えたオレは一人、町、というか市の中心である駅前広場までやってきていた。

ユダ曰く、
『いくら化象と言えど、完全消滅からの再生には今暫く時間がかかる』

とのことで、具体的には残り3時間程度らしい。

詳しい理屈は分からないが、同じ化象であるユダが言うのであれば、それは確かなことだと素直に納得した。

正直、こうして落ち着いて考える猶予が残っていたのはありがた

い。

少し、一人で気持ちを整理する時間がほしかったから。

ユダに反対されるかと思ったが、現状オレを殺す要因死神がない以上、止める理由はないらしかった。

備え付けのベンチに座り、来る途中に調達したハンバーガーを片手に雑踏を眺める。

帰宅途中のサラリーマンや、飲み会の途中なのか年甲斐もなくはしゃぐ中年男性。数人単位で点在する若者グループなど、人間模様は様々だ。

「……こうして見ると、昼間と同じ街とは思えないな」

もともと夜遊びなんて柄じゃないオレにとって、夜の街はネオン一つ取っても新鮮に映る。

「……ふう」

こうしている間にも時間は経過し、いずれ約束された裁判が始まる。

頭では分かっているけど、こうして一旦天使非日常から離れ、流れる人波を見ていると、“命懸けの戦い”なんて、そんな少年漫画の中でしか聞かない言葉が、我が身に待ち受ける現実だなんて嘘のようだ。意思や覚悟とは無関係に、日常を眺める時間に反比例して現実味は薄れていく。

世の中はこんなにも平穏なのに、今のオレは明日すら保障されてはいない。

前川に勇気付けられ、ユダに可能性を提示された今、それを不幸だとか不平等だなどと悲観思想に浸ったりはしない。

これ以上誰も巻き込まないことに安堵こそしても、悲観思想そんなものに浸るなど、いくらなんでも身勝手が過ぎる。

事の発端がオレならば、解決するのもオレでなくてはならない。全ては自業自得なのだ。

だからきつと、これは確認。

一人の時間を欲しておきながら、わざわざ人が大勢いる繁華街を選んだのは、“非日常”が訪れる前に、“日常”を確かめたかったから、なのだろう。

なんの気なしに携帯電話を開く。

いい機会だし、両親に電話でもしようか。

思えば、オレは親不孝な息子だった。

ずっと煙たがってばかりで、向けられる愛情には背を向けてばかり。

ここ最近を着信に気づいても、反応することは少なかった。

家族とは最も身近にあるべき日常であるはずなのに、それを退屈の象徴だと思い込んで自ら遠ざけていたが為に。

ディスプレイに映る、見慣れた電話番号。

そのまま、

「……………」

ぱたん、と閉じて、ポケットに戻した。

「…………縁起でもない」

これではまるで、死ぬ前にやり残しを消化しているみたいじゃないか。

オレが明日を諦めていないならば、電話なんて何時でも構わない筈だ。

今である必要なんて、ない。

こんな安っぽいハンバーガーが最後の晚餐だなんて冗談じゃない。だから、明日。

明日は前川と挨拶を交わして、両親に電話をして、そして、いつもより豪華な食事をしよう。せっかくだからユダや前川を誘って。なんなら、オレの驕りでもいい。2、3人分位ならオレの財布も耐えてくれるだろう。

大義名分など無くとも、オレが戦う理由は、きっとその程度のさやかなもの。

気持ちも固まった。

あとはただ、落ち着いて刻限を待てばいい。
寮に戻るべく、ベンチから立ち上がり、

「ヘイ、その死相が出た幸薄そうな少年！」

なんて、失礼極まりないフレーズに思わず反応してしまった。
振り返ると、そこにはニヤニヤと笑う一人の男がこちらを見ていた。

外見から判断する年齢は二十代半ばといったところ。

2メートルに近い長身だが巨軀というよりは矮軀。芸能人と見間違っ端整な顔立ち。一つに纏められた腰まである金の長髪に、意味を成さないサングラス。

ようするに、絵に描いたような怪しさ全開の風貌だった。

「……もしかして、オレのことですか」

「もしかしてもなにも、俺の前にはキミじゃないだろう。しかし、反応したってことは、自覚はあるようだネエ。結構結構」

方言ともまた違う、独特な言い回し。

男はなにが楽しいのか、けらけらと笑う。

……いや、違うな。笑うのではなく、嗤う、という方が正しい。真実この男の声は、なにか目に見えない不安を煽る要素を纏っている。馬鹿にするでもなく、嘲るでもなく。それでいて、ただただ不気味に嗤う。

「……………」

……また、厄介そうなのに捉まってしまった。

この男が、どういう理由で話しかけてきたにせよ、相手にしてもろくな事がなさそうだ。

厄介事なら十分に足りている。

第一今のオレに暇人に構う余力などありはしない。

「ため息を殺して、ベンチを離れる。」

「おいおい、無視とはつれないナア。ちよいと話がしたいだけサ。見ず知らずの他人をきちんと警戒するのは、大人としちゃあ関心するけど、マア、そう邪険にすんなよー」

うわ、ついてきてるよ、この兄ちゃん。

想像以上に性質わりい。

「いや、すんませんけど、オレも忙しいんで
会話を切る。」

「まーまー、そう悪い話じゃないって。互いに有益な話サ」

……切れなかった。困ったことに、強靱な精神耐久値メンタルをお持ちのようだ。ホント、マジで困る。

「……はあ。あのですね、詐欺師はみんなそんなことを言いますよ。そんな悪徳勧誘丸出しの言葉じゃ、はい、わかりました、なんて今時小学生だって信じません」

「こりゃ、手厳しいネ。けどね、少年。本当の詐欺師ってヤツはこんなもんじゃないぜ。なにせ、疑われたら商売上がったりだろう。自らを詐欺師と称するには、“怪しくない”ことこそが絶対かつ最低条件なのサ」

その後、これはまっとうな仕事してる奴にも当てはまるけどナ、と続けるが、

まあ、詐欺師の条件云々は置いといて。

「そうスカ勉強になりましたありがとうございますさようなら」

「一言で言い切るとは、やるな少年」

おお、とか感心する金髪グラサン。そんなことで感心されても嬉

しくねえよ。

なかなか、諦める気配を見せないな。

…あー、確か駅の中に交番があったはずだ。

ここからだ、全力で走って2分くらいか。

面倒だが仕方がない。撒けたらそれでいいし、追っかけてくるなら、最悪警察に頼るまでだ。

そうと決まれば、実行あるのみ。

「おっ」

ダッシュ。

「おお、気だるげな外見とは裏腹に意外とアクティブだな、少年」
声が遠のいていく。

金髪グラサンはその場から動かない。いきなりの行動に一瞬驚きの表情を見せたが、口元は依然ニヤついたままだ。

よし、これで撒いたか。

「……やれやれ、本当は任意同行が好ましかったんだけどナア。まあ何事も臨機応変に、ってネ。

話を聞いてもらえないなら、聞くしかない状況を作るまで」

声はもう、ほとんど聞き取れない。

「」

男は何事か呟くと、ぱんつ、と手を鳴らした。

ノイズが走る。

瞬間、音がオレに伝わるよりも速く、大気はコンクリートと化した。

「なっ…!?!」

驚愕で足が止まる。

あれほど騒がしかった街から音が消え、行きかう人々は一様に精巧な人形と化している。

この光景を、オレは知っている。

なにせ、数時間前に体験したばかりだ。忘れられるわけもない。

「これは、結界……!?」

「さて、これで少しは話を聞く気になったかな、少年。いや、新見望クン。

まさか、この状況下で天使も連れずに単独で出歩くとはネエ。よほどの度胸の持ち主か、ただの馬鹿か。どちらにせよ、命が惜しいなら、もう少し慎重になったほうがいい。ま、天使とはあまり関わり合いになりたくないんでネ。こちらとしては好都合なワケだけど」

男はゆつくりと、こちらへ歩み寄る。

「ああ、別に警戒しなくていい。この通り、ほら」

男は俺へ手を伸ばす。

身構えるも、間に合わない。

伸ばされた手は、そのまま、

「……!?」

見えない障壁によって弾かれた。

「この中だと、俺もキミには触れられない。悪意云々ではなく、そういうルールだからネ。人の身で因果律を捻じ曲げるのは、ちといき過ぎだ」

会った時と変わらないニヤニヤ笑いは崩さず、だがサングラスの奥の目は笑ってはいまい。

「キミが巻き込まれた一件については、ある程度把握しているヨ。

死神に襲われて、天使に救われる、なんて若いのにまあ波乱万丈なコトだネ」

「……アンタは、なんだ」

誰だ、とは問わない。

重要なのは、男の名前ではなく、与えられた役割。この男は、俺の知らない世界で何と称される化象なのか。

「んん？ 勘違いしているようだネ。結界を作るのは、何も化象達だけじゃあない。然るべき手順を踏めば真似事くらいはワケないサ。

俺はれっきとした人間だよ。天使や死神が化象側の均衡保持者な

balan sa

ら、俺は人間側の均衡保持者。そうだな、君達的に言えば、魔法使
いってところ、かな」

厳密には違うけどネ、と自称魔法使い。

死神に天使ときて、次は魔法使いかよ。

耐性が付いてきているからか、今更、存在することに驚きはしな
い。

今ならネッシーだろうがアッシーだろうが信じる。

ユダの言っていた異能者達、というのは具体的にこの男のような
者達を指すのだろう。

「……へえ。で、その魔法使いさんが、いったい俺に何の用だ」

寮へ戻ってユダに助けを求めようにも距離が離れすぎているし、
この結界の中で逃げ場がないことも承知している。

警戒は緩めず、せめて気圧されないようにと男を見据えて問う。

「……………」

魔法使いは答えない。

なにやら、険しい面持ちで虚空を睨んでいる。

「……おい？」

「……………」

なおも返答なし。

……？なにやら様子がおかしい。よく見ると、脂汗を掻いている
ような気が

「……ぶっはあ！」

「うわ！？」

「……ぜえ……ぜえ！いや、無理無理！こりゃキツイって！街規模の
結界維持なんて無理だって！」

お手上げ、なんて、尻餅をつく、自称魔法使い。

街は喧騒を取り戻し、夢は終わる。

なんてことはない。

口を開かなかったのは単に結界の維持に必死で、いっぱいっぱ
いだったから、みたいだった。

「やっぱ、年甲斐もなくカッコつけて無理するもんじゃねーわ」
そんな、なんとも締まらない姿に、すっかり毒気を抜かれて。
「……………」

逃げ出すタイミングを逃していた。

Angel/human's side measure/7 (前書き)

ようやく、折り返しです。

来栖が語る“人間側の対処法”とは……。

Angel/human's side measure/7

Angel/human's side measure/7
10/4

「ぶはぁー！生き返った！いや、助かったよ、少年！」

「……ドウイタシマシテ」

コンビニで調達してきた緑茶（オレの自腹）を美味そうに飲み干す金髪ヤンキー。

外見に反しておっさん臭いことこの上ない。

あの後、「上司が恐いんで、マジで話を聞いてくれ少年！この通り！助けると思って！」なんて情けない理由で、動けないおっさんを連れて元のベンチで相手をする事に相成った。

「ふう、落ち着いた。寄る年波には勝てんネ。

さて、なんの話だったか。そうだ、恋の話だったな！よし、任せとけ！こう見えて俺は　　って、ヘイヘイ、待て待て少年！無言で立ち去ろうとするな！」

肩を掴まれた。

…チツ。

「自己紹介　は、必要ねーかな。なんにせよ、多分忘れるだろうし。この場では、適当に来栖とでも呼んでくれ」

偽名だけどネ、と来栖。

「それとも、やっぱり本名が気になる？」

ねえ、ねえ、とくねくね動く来栖。

……うざったいなあ。

見捨てておけばよかったかもしれない。

「いえ、別に」

キッパリ。

「……友達に対して愛想がないナア、キミは。ま、いいけど」

本当に気にしていないのか、さて、と会話を変える来栖。

というか、いつの間にか友達にされていてマジ、扱いに困る。

「キミは化象のことを、どの程度知ってる？」

「雨とか風みたいな現象で、形のない、本来は認識できないモノの総称。……そう、天使からは聞いてます」

「はい、正解。……そうだナア、そう、例えば雨。少年、雨がどうして降るか知ってるかい」

「……いえ」

「浅学だナア。若いうちは興味のあるなしに関わらず色々勉強しろよ。特に、学校に通える間はサ。大人になってからだと大変だぜ？」

まあ、年寄りの小言は置いとくとして。

大まかに説明すると、まず大気中の水蒸気が気温の急激な低下等で固まって水粒になる。

この水粒が集まったものが雲。

雲は成長し、やがて積乱雲とかの雨雲になり、雲の中の水粒が一定以上大きくなると、地表に落ちる。

これが、雨の仕組みだ」

「……はあ」

それは理解できたが、なんの意味があつてそんな話をしたのだろう。

「察しが悪いナア。知識が無ければ、せめて直感くらいは磨いておけよ、少年。」

つまりさ、雨は気象という名の現象だろう。現象が発生するには、それなりの条件が必要になるってコト。

それは、天使や死神のような化象も同じなのサ」

「……！」

言われて、ハツとする。

……そうだ。

死を願ったくらいで死神が現れて、救いを願えば天使が現れるのなら。

そんな程度で現われるのなら、今頃この世界は化象で溢れかえっている筈だ。

「一応、それも条件の一つではあるよ。元々、その二つの願望は相反するものだから、天使と死神が同時に存在する、なんてありえない事態なんだけどネ。」

それにしても、この短時間の間に矛盾した願いを持つなんてキミも大概、業が深いネエ」

反論できない。

それは、オレの自己嫌悪の根源だったものだから。

前川に感じた、後ろめたさの正体。

「条件二つ目。」

キミは既に体験済みだろうけどネ。

死神は言うまでもなく、事故や事件等の突発的な死に面した場合、天使は逆。死ぬ運命にない命が想定外の危機に晒された場合に現れる。

けど、そんなものは全てきっかけに過ぎない。

化象が現れる最大の原因はね、認識される、という一点に尽きるのサ。学術的には観測学って言うんだけど、この辺りまで掘り下げると長くなるから、手短かにいこうか。

簡単に言えば観測する、という行為は直接的でなくとも、その対象に影響を及ぼす、という考えのコト。

万物は観測されて初めて存在の意味を持つ。逆に言えば、観測されなければ“無い”と同じなんだヨ。

ただのラッキー、アンラッキーだった筈の幻想は、キミに認識されたことによって形を得てしまったのサ」

無害を有害へと、変えてしまった。

オレが、認識してしまったが故に。

「ま、あくまでキミの個別現実での話だけネ。キミに認識されずとも、化象は元々この世界に在るものだし。見るだけなら俺にだってできる。

だからさ、問題は何故普通の一般人であるキミに、彼等が見えたのかってコト」

答えは待ち合わせていない。

ユダと話した時と同じだ。

……そんなこと、オレが聞きたいくらいだ。

「……ちよつと待つてください。それは、おかしい。

元々、化象が見えていたのなら、今回に限らず、これまでに化象に遭う機会はいくらでもあつた筈でしょう」

今更言うまでもなく、化象に遭つたのは今回が初めての事だ。

「その通り。けど、考えてもみなよ。

天使はもとより、死神に遭うのだって、そんなに簡単なことかなア。

この平和な国で人死に直面する機会なんて、そうそうないと思うケド」

「それは、そうかもしれないですけど。でもそれは、天使と死神に限つた場合でしょう。

条件さえ満たせば、何か他の化象に遭う機会があつた筈だ。たまたま無かつた、というのはいくらなんでも無理がある」

「うん、あつただろうね。じゃあ少年、今この場で風の精霊は見えるかい？」

「……いや、何も」

「だろう？ 風もまた現象の一つ。その化身は世界中至るところに存在している。けれど、キミには認識できない。

これがまた、不可解な点の一つ。どうやらキミは天使と死神しか認識できないらしい。

別に、それしか認識できない、という事例はごく当たり前のこと

なんだけどネ。

だから問題なのは、キミに認識できる化象がよりにもよって、共に因果律に干渉する化象だってことなのサ。

キミが助からなければ、その存在は“無かった”ことになり、キミがいなくても不思議じゃない世界であるよう、運命が改竄されてしまっ」

……そうか。

そこでようやく合点がいった。

この男がオレの前に現れた理由。

“人間側の都合”に。

矛盾がないよう、世界が修正されるということは、今の歴史を歪めてしまうということだ。

「そういうコト。

キミがいない世界となると、一番影響を受けるのは親族、つまり肉親だろうね。

キミの両親は出逢うことなく、他人のままかもしれないし。

たとえ出逢って結婚したとしても、生まれてくる子供はキミではない、知らない“誰か”になる。

そういう、今の俺等からすれば“IF”に過ぎない世界が正史になっってしまうのサ。

もう、わかっただろう。これは、キミ一人の問題なんかじゃない。キミが関わる全てを巻き込んだ事件なんだって」

「……………」

「俺が言うのもなんだけど、そう気を落とさないで。そうならないように、天使は光臨したし、俺が現れたんだから」

「別に落ち込んでなんかいませんよ」

はつきりと言い切る。

オレが死神に殺されれば世界を巻き込む事態になる。

正直、そこまでの大事だなんて思ってもみなかった。

覚悟の大きさを測り違えていた。

誰とも、何にも関わらず生きていくことなどではしない。

化象に限らず、生きている、という事はそれだけで少なからず世界に影響を与えてしまう。

それは、目の前の男だって同じだ。

けれど、それに何の問題があるだろう。

負けられないのは、最初から変わらない。

オレはユダの前で。あるいは前川に対して。

覚悟も決意も、既に終えているのだから。

「……驚いたナア。いや、感心したよ。

もう少し動揺するもんだと思ってたケド、存外に強いんだナ、キミは」

「そんなこと、ないです……。死ねない理由があるから諦めきれないだけ、なんだと思います」

オレは弱いから。

こうして背中を押してくれる誰かがいないと立っていられない。

それは強さなんかじゃない、と思う。

「そう謙遜しなさんな。自分の弱さを認めるのも一つの強さサ。大人だって、なかなかできやしない。誇っていいコトなんだよ、少年」

「……はあ、まあどうも」

普段から褒められることに慣れていないからか、どうにも照れくさい。

「さて、じゃあ前置きが長くなったケド、俺も責務を果たそうか。

キミが死ぬコトのないよう、“人間側の”死神への対処法を伝えるのが俺のお仕事だからネ。

ちなみに、天使からはどんな対策を聞いた？」

「……ええと」

ユダから受けた説明を可能な限りそのままに、来栖へと伝える。

来栖は口を挟まず、腕を組んで大人しく話を聞いていたが。

一通りの話を終えると、

「……ははあ、それはまた、随分と分の悪い賭けというか、なんとも天使らしい理想論だナア」

呆れた、とばかりに肩を竦めた。

「現実問題さあ、キミは死神に勝てると思うかい？」

「……そんなの、やってみないとわかりませんよ」

「いいや、一度でもアレと向き合っているならわかってるはずだ。そんなこと、不可能だって。」

人間として打ち勝つ？

逆だよ、少年。人間だから勝てないんだ。

命あるものにとって“死”は癌細胞のようなもの。延命処置はできて、消すことなんて出来やしない。生きながらにアレを消したいのなら、不老不死にでもなる他ない

今まで死神に挑んできたヤツ等は、それこそ腐るほどいたよ。繁栄の果てに不老不死を求めた霸王。不治の病に抗った天才超能力者。黒魔術における永久機関を得ようとした魔術師etc…。

中には未だ逃亡中の化物もいたりするけどね、まあありや例外。

ともかく、立ち向かおうとする勇氣は買っけどネ、そりや、無謀ってヤツだ。根性論だけじゃどうしようもないコトだってあるんだぜ？」

……言われるまでもない。

なにせ、一度は至った結論だ。

「それなら、どの道どん詰まりでしょう。諦めるくらいなら、やるだけやってみるだけです」

諦めたら、そこで終わりなのだ。

たとえ奇跡のような大博打だろうと、1パーセントでも可能性があるのなら、それに全力を尽くすだけだ。

「いや、結構結構。」

その諦めの悪さ、生き汚さこそ人間として正しい。けど、あなたがちどん詰まりってワケでもないヨ。

……まあ、天使が言わなかったのは当然かな。あの堅物共が、提案できるはずもない。

思い出してごらん。死神が何の目的で、キミを襲うのかを」

死神が、俺を襲う理由。

……それは。

運命に記された“死”を、回避してしまった、から。

「あ」

それを、正しく修正する、ため、に。

「本当はわかっているんだろう？」

君が、死神に勝つ必要なんてないんだ」

ならば、本来、

「……やめろ」

死ぬべき運命にあったのは。

「戦う必要すらない。いや、“自分以外の死”に立ち向かうなんて、とんだお門違いなんだヨ。そんな無駄な事をしなくても、この一件は簡単に解決する。

キミが歪めてしまった運命を、君自身の手で正せばいい。それだけで、キミの悪夢は終わるんだから」

一体、誰だったのか。

「……やめてくれ」

息が苦しい。

心臓が圧力で潰れそうだ。

言っな。

……その先を、聞きたくない。

「だからさ、少年。助かりたいのならば、君が誤って助けてしまった娘、前川ちゃんだったかな、をキミの手で殺しなおせばいい」

考えてみれば当たり前のこと。

死すべき命が、正しく死ねば、死神は 消える。

だけど、

「ふざけんな！そんなこと、できるわけないだろッ！」

感情に任せて来栖の胸倉に掴みかかった。

周囲の視線が集まる。

殴らなかったのは、辛うじて理性がブレーキをかけたからだろう。来栖は、間違ったことは言っていない。ただ、対処法を提案しただけ。それが最悪のものであれ、悪意からのものではないはずだ。この場で来栖を殴れば。

それは、嫌なことから目を背けて八つ当たりする子供と同じだ。

「痛いナア。離せよ、少年。」

何をそんなに憤る理由があるんだい」

来栖は笑みを崩さない。

いや、この男は最初から表情を変えていない。

人間味を感じさせない、感情を偽る完璧なポーカーフェイス。

「間違った形を正しい形に戻すだけだ。当たり前のことだろう。」

……ああ、人を殺すことに抵抗があるなら、それは安心していい。

キミが手を下そうと、彼女の死は元の事故死として処理されるサ。キミには彼女を殺した罪悪感はおるか、記憶も残らないヨ。当然だろう、正しい史実に戻るということは、今この間違った時間も全て、無かったことになるんだから」

愉しげな口調が癪に障る。

……安心しろだと。

それは最後の手段であり、選んではならない最悪の選択肢だ。新見望に罪はないと言われようと、自責の念が残るまいと。安心できる要因など、何一つとしてありはしない。

「……だめだ、それだけは、しちゃいけないんだ。……前川はなぜなら、一度殺した。」

見殺しに、した。

恐怖に負け、我が身可愛さに。

未だに痛み続ける、後悔の棘。

なのに、

それをもう一度、繰り返せと来栖は言う。

助かりたければ、今度は自分の意思で、前川の死を容認しろと。

オレは、そうならないために。後悔を清算するために。

死神と戦うと決めたはずなのに。

「……わからないナア。前川剣とキミに交友関係は無いって話だけど。言わば、赤の他人だろう。ははあ、もしかして片恋相手だったかな」

「……そんなんじゃ、ないです」

来栖の言うとおり、オレと前川は他人同士だ。

今は、まだ。

「なら、なにをそんなに躊躇う。

キミはアレかい。命全てが尊いなんて、夢物語を本気で信じているクチかな」

「……」

違う、だろう。

オレにとって。誰にだって。

他人の命には、悲しいほどに、無関心なもの。

共感も同情もない。他人の死に対する最高の追悼は、無関心であるべきなのだ。

仮に、今の気持ちも感情も失って。

前川が死んでしまっても、きっとオレは、涙一つ流すことはないだろう。

けれど、今は。

今のオレにとっては、

「……前川は、違うんだ」

俯き、呟く。

友達ではないかもしれないけれど。

他人に過ぎないのかもしれないけれど。

それでも、“赤の他人”などでは決してない。

負い目だけじゃない。オレはオレの意思で、前川に死んでほしくなんてないんだ。

「だとしても、まだまだ命を賭けるには値しないネ。

たとえ親友だろうと、家族だろうと。自分以外の誰かのために、ただ一つきりの命を引き換えにするなんて、そう簡単なことじゃない。

ま、それでも戦うというのなら止めはしないサ。最悪、キミが負けると判断した場合は、こちらで前川剣を処分するまで」

新見望の敗北は、そのまま前川剣の死を意味する。

手を下せないオレに変わり、前川を殺すと、来栖は言った。

「止めることなど、できない。

「多少、史実にズレは起きてしまうだろうけど、それでも一人が消える矛盾よりは幾分マシだろうし」

来栖はベンチから立ち上がる。

「自己犠牲、偽善、大変結構。覚悟も決意も大切だけどサ。少年、キミさ、都合よく前川ちゃんだの天使だのを言い訳にしないかい？」

……言い訳に、している？

前川や、ユダを。

「もう一度、よく考えてごらんヨ。

負けられない理由。キミが本当は、何のために戦うのかを」

オレは、本当は、何のために…

「健闘を祈るよ。

誰も犠牲しない。いや、キミと前川ちゃんが共存する世界、なんてハッピーエンドが欲しければ、せいぜい頑張ることだ」

来栖は闇へ溶けて行く。

「…あ、そうそう。俺のことは天使には内密に頼むよ。余計な

ことを吹き込んだと知ればほら、怒った天使に魂ごと昇天されられかねないからネ」

どこまで本気なのか、来栖はケタケタと嗤う。

ベンチには、答えを見出せないまま、力なく俯くオレ一人が残された。

A n g e l / a n g e l ' s s i d e m e a s u r e / 8 (前書き)

更新が遅れて（r y

週間連載の漫画家さん達は偉大だなあと思う今日この頃です。

Angel / angel's side measure / 8

angel / angel's side measure / 8
10 / 8

現在、午前二時ジャスト。

一人、ぼんやりと夜空を眺める。

雲は流れず、風はない。

夕刻、夜、そして深夜。

既に三度目の、時の牢獄。

それが、間もなく訪れる“死”を告げていた。

死神との対峙場所は学校の校庭を選んだ。

考えうる限り、これ以上誰も巻き込まず、存分に動き回れる場所は他になかった。

停止した時の中での出来事は、現実に影響を残さない。

結界が解除され、再び時が動き出せば、世界に矛盾が生じないよう、“無かったこと”もしくは“正しい形”へと修正される。

死神が本来の標的^{前川剣}を狙う事態を想定し、ユダには前川宅付近で待機してもらっている。

万が一ということもありうる。

可能性が0でないのなら、万全を期すべきだ。

ことがことだけに、慎重すぎるくらいで丁度いい。

この場所から前川宅（オレは前川宅の場所を知らないが、ユダは魂を感じることで、場所を特定できるらしい）までは約3キロ。

死神を感知し、駆けつけるには絶望的な距離とも思えるが、彼女

が光臨した際の驚異的な速度を考えれば、3キロなど無いに等しいだろう。

……もつとも、それも戦いが始まるまでの事前策でしかないが。来栖はオレが死神に襲われたことを知っており、なおかつ、一時的ではあったがこの結界を再現して見せた。

オレが負けると判断すれば前川を殺すと宣言した以上、おそらくアイツもこの結界内のどこかでこちらの様子を伺っているはずだ。

結局、来栖のことはユダには話さなかった。

結果的に前川を人質に取られるような形になってしまったが、少なくともそれは悪意からのものではない。

事象を捻じ曲げる、化象たる天使の善性とは違う。一を犠牲に十を救う、人間が抱く正しい正義の在り方。

来栖はオレに、この一件の真相を話した。

なら、その行為には報いるべきだと思ったのだ。

「……ふう」

深呼吸をして、見えない不安を追い払う。

無人の校庭。警備員は彫像と化し、警報も意味を成さない。

この場所こそ戦いの場所には相応しい。

そう、この場所ならば。

これだけ広大で、隠れる場所が一つとして存在しない空間ならば。

決して、オレが逃げ出すことはない。

間もなく、罪人の善悪を問う裁判が始まる。

なんのために戦うのか。

オレが戦う、本当の理由。

結局、来栖からの問いに対する解答は出ないままだ。

迷いはない。

戦う意思は揺るがない。

決意も、覚悟も。オレを動かす要因は全て揃っている。

けれど。

けれど、それは本当に。

本物の想いなのだろうか。
その答えは未だ

「と」

圧倒的な存在の重圧を感じ、視線を送る。
そこには。

影より這い出た、死の具現。

髑髏の仮面と鉛色の大鎌が月明かりを鈍く反射する。

「……よう、半日ぶり」

「」

死神は何も答えない。

ただ、意思の無い視線を罪人へと向ける。

「勤勉なこったな。それが、神の意思ってか。はっ、そんなもんクソ喰らえだ」

まったくしまらない。

わずかに声が震えていた。

当然ながら、会話が成立するなどとは思っていない。

そもそも、プログラムであるヤツは、そんな無駄な機能は有していないだろう。

だから、ただ、

「……ッ!!」

この重圧に潰されないように、精一杯強がっただけ。

握り締めた拳がじっとりと汗ばんでいる。

逃げ出したい。

許されるのならば、今すぐにでも。

奥歯を砕きかねないくらいに噛み締め、生きよつとする本能を、
理性をもって押さえ込む。

不意に、ゆらり、と影が揺れる。

瞬間。

死神は横薙ぎに獲物を構え、赤い軌跡を残しながら標的へ肉薄する。

時間にして2秒。

視覚はヤツを捉えている。

体は十全。

反射も、脳からの神経伝達も、余裕をもつて間に合うだろう。
だが、躲せない。

足は地面に縫い付けられている。

首どころか、腰から上を粉碎せんと繰り出された必殺の一撃。
しかし、刃はオレに触れることなく、

「待ちなさい。貴様の相手はこの私です」

「」

飛来した流星によって、所有者もろとも薙ぎ払われた。

「うわッッ!!」

衝撃風に吹き飛ばされ、地面を転がる。

遙か彼方より光跡だけが空に残る。

光速から停止へ。

生じた慣性エネルギーは、土砂を爆散させ大地を抉る。

「……げぼっ、いつ……」

徐々に砂埃が晴れていく。

無論、クレーターの中心は隕石などではなく、澄まし顔の天使と、
髑髏面の死神。

あれだけの爆発の中、互いに傷一つない。

オートマタ

「無駄は承知で警告します。退きなさい、自動人形。我々は共に、
全能神の代行者。共闘はしても、対立するなど、ありえない筈です。
彼の死はアカシックレコードにはない。バランスーたる貴方が均
衡を崩しては元も子もないでしょうに。イレギュラーな存在であれ、
消滅させようとするのは、いささか物騒が過ぎるのではないですか」

「……ふう。やはり、無駄でしたか。自我を持たぬ貴方達が、課せられた責務^{プログラム}に反する行動をとるわけもない。

いいでしょう。システム側のバグですが、この場合は管理者に代わり、この私が修正します」

月光、星の燐光、あらゆる光源がユダの右手に収束、圧縮され、確たるカタチを成していく。

「あれは、弓……か」

現れたのは巨大な弓。

「……いや、違う」

しなやかさとはかけ離れた、無骨な骨子。

対象を射抜くのではなく、撃ち貫くことに特化したフォーム。矢を射るのではなく、弾丸を射出するための機構。

それは、機械弓の名を冠する大型弩、バリスタのものだ。

だが異様なのはそんなことではない。

ユダの矮躯に不釣り合いな大きさも、それだけの重量を片手で振り回す出鱈目さも特筆に値しない。

真に異様なのは、矢を番え、射出するべきその部位に。

機械弓の全長を大きく上回る刀身がある、という点だろう。

銃剣ならざる、弓剣。

いかなる神話、歴史にも登場しえない、人では扱えぬ歪な複合兵装。

それこそが、夕刻に死神を消滅させ、今またこうして牙を剥く武器の正体だった。

舞台は整い、役者は揃った。

さあ、始めよう。

以下、回想。

前川と別れ、来栖と出会う前の話。
決意を固め、真実に気づくまでの話。

あれから前川と別れ、リビングに戻り作戦会議と相成った。
ちゃぶ台を挟んで座り、開口一番。

「結論から言つて、ご主人では死神には勝てません」
しれっと。

そんなことを言うユダさんだった。

どうも、結論から言つて、という前置きがユダの口癖らしかった
が、それはともかく。

「いやいや、だから、それをどうするかをですね」
話し合つてるんじゃないスか。

「人の話は最後まで聞きなさい。まあ、私は人ではないんですけど
ね」

ふっ、とどや顔のユダさん。

どうでもええわい、そんな自虐！

「私が言つたのは、あくまで“今のままでは”という話です。
先程、ご主人が述べたとおり、命あるものでは死神には対抗でき
ない。これは、我々が“化象”たる所以であり、自然の戒律だから
です。」

神性や魔性を纏わぬ者では、触れることすらかなわないでしょう」
対峙した時点で、加害者と被害者が明確に別けられたワンサイド
ゲーム。

「なら、どうすんだよ。まさか修行でもして不思議な力に目覚めろ、
とか言わないよな」

若干、不貞腐れ気味に言い返すオレ。

「だから、話は最後まで聞きなさい」

すばーん！と、ハリセンでひっぱたかれた。

どこから出した、そのハリセン！？

少なくとも、オレの家にそんなネタグッズは存在しない。

いやまあ、そもそも存在自体が不思議そのものなんだから、今更なにが起ころうと驚きやしないけどさ。

「ご主人の着眼点は間違ってはいません。

あなたの方にとって死神は不可避の災厄ですが、やはり例外は存在する。厳格な神父や、厳しい修行に耐え抜いた高僧。または、生まれながらに超然たる才覚をもった異能者などがそれに該当します。彼らならば、消滅は難しくとも撃退、もしくは何らかの形で一矢報いることも可能でしょう」

なるほど。

長年の信仰や、修行の果てに神性や魔性を帯びる、というワケか。しかし。

「ですが、それも不可能です。あれは長い年月を費やして、天才の中からさらに選ばれた者がようやく辿り着く境地。一朝一夕で身につくものではありませんし、死神が活動を再開するまで、約3、4時間。私が指導したとて、圧倒的に時間が足りないうえに、そもそもにして、ご主人にそのような才能はありません」

「……………」

ハッキリ言うなあ。

たとえば、精神と時の部屋があっても無駄骨ですか。

「なら」

すばーん！

「無駄口禁止」

「……………」

……語り部なのに発言権を剥奪されてしまった。

モノローグオンリー。

「神性、または魔性。とにかく、化象に干渉しうる力がなければ死神とは戦えない。

ご主人の才能の有無はこの際、問題ではありません。神性は、こ

ここにあるのだから」

そういつてユダは胸に手を当てる。

「ご主人が死神に打ち勝つ手段は、ただ一つ。

然るべき儀式のもと、私とご主人の精神、魂を一時的にリンクさせ、私の持つ神性をご主人に送り、人間以上天使未満になっていたきます」

…そうか。

それならば確かに。

肉体が神性を帯びてさえいれば、死神にダメージを与えることが可能になる。

人間側から化象側に近づけば、少なからず“死”の重圧も緩和されるだろう。

だが、そんなこと本当にできるのだろうか。

魂をリンクさせると言われても、今一ピンとこない。

「その点は問題ありません。これが動植物とのリンクであれば話は別ですが、幸い人間と天使は外見同様、酷似した魂を持つ。共感、感応さえできれば、接続自体はそう難しい儀式ではありません」

なるほどな。

なにか理屈もあるのだろうか、今詮索すべき事ではないだろう。重要なのは可能不可能の一点のみ。

どの道、説明されたところで、オレでは理解できまい。

「……………」

万事解決か顔を上げると、ユダは俯いたまま沈黙していた。

「どうしたんだ。話を聞く限り何の問題もなさそうだけど」

「いいえ、ご主人。まだ、最大の問題が残っています。

人間にとって化象たる天使の神性は、本来持ち得ない筈の力。魂のリンクが成功しても、ご主人が私の神性に耐え切れなければ、流れ込んだ異物は瞬く間に自我を塗りつぶし、肉体を喰らいつくし、果てには全と同色たる無色となり世界に取り込まれるでしょう。

……死神を打倒するほどの神性ともなれば、尚更」

つまり、失敗すればオレは死ぬ、とユダは言う。

「……はつきりと言ってしまえば、成功する確率はゼロに等しい」
たとえば臓器移植。性別、体格、血液型など。同じ人間同士であ
っても、そこには多くの障害が存在する。

ましてや、人間と化象。

考えてみれば当たり前のこと。

体の中に石ころ一つあるだけで致死に至るように、人体にとって
自分以外のモノなど、全て不要な不純物にすぎない。

「……ですから、私からこうしなさい、とは言えません。他に手段
がないとはいえ、これでは貴方に自害しろ、と言っているようなも
の」

崩壊は当然。自壊は必然。

神性は猛毒となつて、体中を駆け巡り、オレを、壊す。

あまりにもリアルな未来の想定。

馬鹿げている。無謀ですら足りない。

高層ビルから飛び降りて、生死の有無を確かめるようなものだ。

「ですが、化象を打倒するとは、運命を改竄するとは、そういうこ
とです、ご主人」

「……」

……わかつている。

少年漫画じゃないんだ。土壇場で、都合よくパワーアップなどあ
るものか。

そんなものは、必死に努力で天才に追いつこうとする凡人に対す
る侮辱。絶望の中で朽ち逝く命に対する裏切りだ。

ありえない奇跡を望むのなら、相応の代価が必要になる。

「……よし、その方法でいこう」

もとより選択肢など存在しない。

オレに取捨選択の余地などない。

生きようとする行動には、必ず表裏一体の死が付きまとう。

賭けるものは、常にオレの命。

まるで、ロシアンルーレットのようだ。

装填された弾丸は3発。あるいはそれ以上。

一つ歯車が狂えば、容赦なく弾丸は頭を吹き飛ばす。

……けれど、

「オレは死なないよ、ユダ」

奇跡を起こすのはいつだって、可能性を棄てなかった者だけだ。

「オレは、死なない」

なにせ、先程誓ったばかりだ。

前川との約束を破ってしまうし、なにより、自分を守護するために舞い降りた天使が、その役割を放棄しかねないほどの覚悟で、解決策を打ち明けてくれたのだ。

その覚悟を汚すことなど、できない。

「だから」

ユダの銀色の瞳をまっすぐ見据える。

前川は言った。

身を挺して助けてくれた、それで十分なのだ。

ああ、その通りだ、前川。

オレは、身を挺して命を救ってくれた、この天使のためにも。

もう二度と、自ら命を放棄することはない。

可能性が1パーセントでもあるのなら、たとえ藁でも掴んでやる。

そして、現在に戻る。

Angel / true oneself / 9 (前書き)

ようやく佳境ということもあり、難産しました(汗)

Angel/true oneself/9

Angel/true oneself/9
10/4

光の剣と、闇の鎌が火花を散らす。

天使はオレを救うために。

死神はオレを殺すために。

同じ化象でありながら、同じ神の使徒でありながら、相反する目的の元に互いを殲滅せんと闇夜を駆け、あるいは裂き、幾度なく切り結ぶ。

闘いが始まり、既に五分以上が経過している。

休む間もなく繰り広げられる、目にも留まらぬ攻防。

天使も死神も、互いに息一つ切らすことはない。

死神は当然として。

天使もまた、当然である。

化象は、肉体を持つオレ達人間とは根本から異なる。

そもそも、“世界の機能”たる彼女等にとつては疲労という概念自体がないのだろう。

おそらくは、首を飛ばされようと。

胸を貫かれようと、彼女等は止まるまい。

止まることがあるとすれば、それは目的を達した時か、夕刻同様、完全に消滅させるしかない。

化象を構成するのは血肉ではなく、信仰、希望、絶望、そういつた形の無い認識に他ならないのだから。

「！」

白銀の機械翼が展開する。

余剰エネルギーは青白く放電し、淡く光を帯びる。

「はッー！」

爆ぜる。

光跡を残しながらの突進から、袈裟に一闪。

異形の剣による超重量の一撃。

防げない。

まずもって、あんなもの大鎌では防げまい。

なにせ、防御機能はおろか、剣戟すら想定されていない、人間の首を刈り取ることにのみ特化した武具なのだ。

対して、ユダの弓剣はロングソードにも似たフォルム。

斬るのではなく、鎧ごと粉碎する、剣としてはより原始的な機構。防ぎにかかったところで、その鎌ごと存在を両断しよう。

「

空気が爆散する。

地面が陥没し、上体が沈む。

黒色の機械翼が逆噴射をかけ、衝撃を相殺する。

鎌は両断どころか、ひしゃげることすらなく斬撃を防ぎきり、

「

あろうことが弾き返した。

間合いが広がり、両者の対峙は振り出しに戻る。

「

死神の攻撃を時に躲し、時にいなし、一瞬の隙について斬撃を見舞う。

言葉を失う。

戦闘という非日常を初めて目の当たりにしたからか。

それとも天使と死神、その破格の超常を改めて認識したからか。

いや、どちらも間違いだろう。

そんなことよりも、オレには。

まるで、よくできた殺陣のように。

神代の絵画のように。

舞うように、踊るように。

剣舞を続けるユダを、あまりにも美しいと。

全てを忘れて、見蕩れてしまったからだろう。

「……なんて、デタラメ」

万有引力も、物理法則もなにもかも。

化象にあたえる影響など、毛ほどのもの。

物質の縛りの無い、奇跡の具現。

故に、化象。

故に、超常。

ぎいん、と。

幾度目かの剣戟に我に返った。

「……しかし、あれで精一杯の手加減かよ……」

ホント、目どころか現実を疑いたくなる。

そう、互角に打ち合っているのは。

消滅から復活した死神の力が、ユダと拮抗しているからでは断じてなく。

単に、ユダが全力で手加減をしているためだった。

作戦はこうだ。

たとえ天使の神性を得ようと、一般人であるオレにその能力を使いきなすことはできない。

使い手の技量があつて初めて武器は生きる。

武器を得えたところで、剣どころか銃の扱いすら知らない今のままでは、みすみす殺されに行くようなもの。

だが。

死神はどこまで進化しようと、基本的に意思を持たぬプログラムである。

故に、戦闘を含めたあらゆる行動は臨機応変ではなく、必ず状況に合わせた行動パターンが存在する。

これを利用しようというわけだ。

つまり、ユダが死神と対峙しながら、可能な限り死神の戦闘パターンを記録する。

ユダと接続する際、その戦闘記録を共感し、戦闘経験を体得する。そうすることで、戦闘に関してズブの素人であるオレを即席の戦士にまで引き上げる。インスタントヒー

本来、天使と死神では戦闘にすらならない。

常に一方的に命を刈り取る側である死神という“化象”にとって、戦闘は想定外なのだろう。

鎌は象徴でしかなく、武具としての機能は持ち得ない。

そもそも、ただのプログラムにすぎない死神と、天の意思の代行者たる天使では“化象”としての格が違う。

ユダが全力で戦えば、ただの殲滅戦にしかならないことは経験則からも明らかなのだ。

圧倒的に死神を凌駕したのでは意味がない。

あくまでも、ユダと接続を終えたオレと同等の性能で戦わなければならない。

ユダが甘んじてこのような茶番を演じているのも、機械弩を使用せず接近戦に徹しているのもこのためだ。

闘いが色を変え、互角の均衡が崩れ始める。

徐々にではあるがユダが死神を追い詰めていく。

地上戦は不利と判断したのか、死神は闘いの場を空へと移そうと翼をはためかせ、

「ッ！させませんッ！！」

一瞬にして背後へ回り込んだユダの一撃によって、その両翼を奪

われた。

「……………」

地に墜ちる死神。

あの大破した翼では、もう飛行はできないだろう。

見下ろす救済と、跪く死。

文字通りの、天と地程の差がここある。

こうして 闘いはここに決した。

「 終わりです。わかりきってはいましたが、本当にその程度とは。話に聞く修復に伴う自律進化も、案外大したこともない」

言葉に宿るのは失望か、同属を憂いる哀愁か。

「……ふむ、このまま礫にしまいましょうか。そのほうがこちらとしても手間が省けるというもの。ふふ、断罪者が礫とは、えらく滑稽だとは思いませんか」

……こええ。

……ユダさん、超こええ。

天使なのにドS。

色々と天使に対する認識を改めざるを得ない。

と、不意に死神が大きく距離を取る。

「無駄なことを。もはや勝敗は明白、……………!？」

まるで降伏を告げるように、両腕を広げた。

「……なんのつもりです。まさか、本当に降伏のつもりではあるまい」

腑に落ちぬ、とユダは顔をしかめる。

「!？」

髪を揺らす、気圧変化。

頬を撫でる、空気圧。

「……これは、……………風!？」

時が動かぬこの世界で、死に絶えた自然現象が息を吹き返す。

だがそれこそ、不自然。
なぜなら、これは。

「あ」

それは、見るもおぞましい汚物の腐海だった。

「ぐ、…あ！ ああああああッ！！」

風は渦を巻き、瞬く間に嵐へと変貌する。

堪えきれず、耳を塞ぎ、地面に倒れこんだ。

神経という神経がささくれ立ち、足元から千の蟲が這い上がってくる。

やめろ、やめてくれ！

……頭が、割れる。

一秒だって耐えられない。

そんなもの、見たくない。

オレの世界が、壊れてしまう。

「ご主人！」

こちらの異変を察してユダが駆け寄ってくる。

心臓が警鐘を鳴らし、脳が危険を訴える。

『せ、す、い、ね、 さえ最初から なければ、 ましい、その を引きずり出し に てくれる、 んじゃえ』

雑音が聴覚を陵辱し、砂嵐は視界を奪う。

「ぐッ！ 空気が穢れていく。なんだこれは…。視界が……。」

貴様、一体なにをした！？」

髑髏面は答えない。

そのような無駄、初めから持ち合わせていない。

死神の、化象のとり行動には全て意味が伴う。

台風の目は、死神なのだから。

最後通告だ。

直視してはならない。

それを認めてしまえば、オマエは人間として破綻するぞ！！

「……貴様」

ユダは何が起こっているのか理解できず、地に伏せるオレから離れることができない。

そうか。

死神が言語を有さないのと同様、ユダはコレを理解する機能を持たないのだ。

善性の化身たる天使には。

この極彩色の風も。

この怨嗟の声も。

認識できない。

人間が化象を認識できないように。

人間の最も醜い悪性。

この行き場を求め、猛り狂う呪詛の嵐を。

「……に、げろ……！」

風は外套の中へと飲み込まれていく。

「動いてはいけません、ご主人！」

……く、状況が掴めませんが、仕方がありません。ここで今一度ヤツを倒し、一時撤退します」

ユダは弓剣を構える。

風が止んだ

大きく膨れ上がる、破裂寸前の風船。

早く、早く、早く早く早く……！

立ち上がらないと、手遅れに、なる。

天使と言わば、真白いキャンバスのようなものだ。

あれが人間の不浄なら、天使の善性は穢れによって塗りつぶされ、意味を剥奪された現象は。

意味を失った天使という名の“化象”は。

ユダは、消滅、する。

鼓膜を破る断末魔を上げて、極彩色の嵐が迫る。

高速回転するミキサーの刃を連想する。

放り込まれた具材の行末など決まっている。

限界まで磨り潰された、土砂と瓦礫と人間のミックスジュースは
行儀悪く地面にぶちまけられる。

「く……！」

自分でも動けたことが不思議だった。

視界を白く焼く激痛、内側から頭蓋が粉碎したような錯覚と引き
換えに金縛りを振りほどく。

シリンダーは既に回転している。

籠められた弾数は6発、つまりハズレはない。

「逃げるッ！ ユダアッ……！」

手を伸ばす。

届け。

届いてくれ。

カチリ、と回転が止まる。

撃鉄を起こし、引き金に指がかかる。

「く……」

そこから先は聞き取れなかった。
汚物に飲み込まれ、景色が横に流れていく。

声が聞こえる。

見えないところへ遠ざけていた声が、すぐ間近から聞こえる。

『なぜ助けた。』

分不相応と知りながら、オマエが負けると判断されれば前川剣は死ぬのだと理解しながら、なぜこんな馬鹿な真似をした。』

ユダはこの嵐の正体に気づいていなかった。

直撃を受ければ、消滅は免れなかった。

オレのために戦っている彼女を見捨てて自分だけが助かるうとするなんて……。

『なら、なおのこと助けようとすべきではなかったんじゃないか？
彼女の使命はオマエの守護だ。真に彼女の行為に報いようとするのなら、自身の命を最優先させるべきだった。』

だから、オマエを動かしたモノはそんな理屈じゃない。オマエの口にする言葉は全て後付なんだ。』

いけないのか。

何か理由がなければ、誰かを助けたいと思うことは間違いなのか。

『そんなことはない。人助けに理由はいらない。それこそ善、意思が絡めばそれは偽善に成り下がる。オマエの取った行動は正しい。
ああ、まったく正気とは思えないほどに。正しすぎて狂っている
しか思えない。』

……うるさい。黙れ。

『前川剣の時を思い出せ。オマエを突き動かした動力は、感情でも、命惜しさでも、ましてやあの女の為なんかじゃない』

……くそ、こんなの防ぎようがない。

耳を塞いでも頭の中に直接声が響く。

やめろやめろやめろ！それだけは知りたくない。それだけは知ってはならない。

耳を塞いでも、頭の中に直接声が響いてくる。

この声からだけは絶対に逃れられない。

なぜなら、これは

『そうだよな。なぜなら、そうしなければ新見望じゃない。

いい加減に認める。オマエはただ、教科書通りの道徳観に従って、いつも通り、新見望らしく行動しただけだ。他者が望む、オマエ自身が生み出した姿、“普通”の新見望像を演じただけにすぎない。

そう
』

オレは

ただ、目前で危機に晒される少女を見て、それを助けるのが“普通”なのだと、そう思っただけ

禍々しく、毒々しくも、人の温かみさえ感じさせるこの風の正体は。

この怨嗟は、無意識に考えないようにしていた、新見望本人の言葉に他ならないのだから。

風が身体を、呪詛が心をズタズタに切り裂いていく。

今ここに至って、新見望がどういう人間なのかを思い知る。

『オマエの行動理念には自己の意思がない。空っぽなんだ。

選択肢は無限に近く存在し、こんなにも自由なのに、なにをしても満たされない日々』

勉強でも運動でも、自分より優れた人間はどこにでも目に付いた。それは趣味であつても変わらない。

そんな中でしだいに、何かに熱中することも、誰かと争うこともなくなつていった。

そうすれば、無力感や劣等感に苛まれることもないのだから。

『自己を強く表現しようとするればするほど世界との摩擦は大きくなる。そして、やがて訪れる無力感、自身の限界、自分はこの程度なのだという現実には耐えられない』

だから、特別な存在に憧れた。非日常を願つたんだ。この世界でなければ、あるいは、と。

『将来の夢はおろか、目先の目標すら定まらないから、ごまんとする他者を模倣し、せめて普通であるよう、あたかもそれが個性であるかのように生きてきた』

何事もほどほどに、それなりに。

普通、中間、平凡。曖昧な、どっちつかずの境界線に身を置くことで、現実から逃げ出した。

それがオレ。

新見望の根幹。

『ただ漫然と生きているだけなら動物にも劣る。
いい機会だ。どうせ生きる理由もないんだろ?』

視界が白く染まる。

『なら、いつそこで死んでしまえ』

弾丸は既に放たれている。
意識を失う直前、ごしゃり、と。
何かが壊れる音を聞いた。

Angel/boy meets girl(deep white)/10

1000件を超えるアクセス、本当にありがとうございます。

想定外にボリュームが膨れ上がってしまったため、分割しようともおもいましたが、結局そのまま掲載(汗)

いよいよクライマックス間近。

どうぞ最後まで、お付き合いくださいませ。

Angel/boy meets girl(deep white)/10

Angel/boy meets girl(deep white)
te)/10

10/4

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

後悔じゃない。

懺悔でもない。

それは、精一杯生きた人間にのみ許される無念なのだと思う。

とうに慣れたはずの無力感と虚無感だけが胸を穿つ。

普通に生きてきて。

普通であるよう生きてきた。

生きる理由さえ不確かな、新見望には、そんなことでしか存在証

明のすべがなかった。

特筆すべき才能がないのならば、せめて平均以下にだけはならな

いようにと。

超常など望むべくもない。

凡人は凡人らしく、ありものの世界で満足すべきだった。

だったのだが。

ことの発端は、たまたま死神に襲われて、奇跡的に天使に救われ

たこと。

そんなことで日常は非日常へと、いとも容易く反転した。

まったく、馬鹿な話だ。

自分の人生に、そんな超展開が待っているなんてノストラダムス

だって予知できないだろう。

初めから気づいていればよかった。

非日常に足を踏み入れるということは、すぐ傍にある日常を手放すということ。

無条件で自分に優しい世界などありえてはならない空想であり。眠りの中で夢見る一時の楽園でしかないのだ。

だから、現実の世界が変わっても、目に映る景色は灰色のまま。たとえ今と異なる世界で生まれても、新見望は新見望でしかないのだろう。

普通であろうとするということは、正しくあるとするということ。

なるべく失敗しないよう、間違いを犯さぬように自己の意思ではなく、多数の意見を是とし、少数を否とする。

それでも、間違いを犯す愚か者。

それが、自分なのだと知ってなお戦えるのか。

そして、それを誰よりも許せなかったのは、きっと

「、う……」

意識が浮上する。

……生き、てる。

どうやら、気を失っていたらしい。

腕、はある。

足も、あるな。

幸か不幸か、五体満足なようだ。

「痛ッ！」

立ち上がろうと力を籠めると、全身に鈍痛が走る。

見れば衣服はボロボロで、出血こそ止まっているものの、体中に鎌鼬に切り裂かれ切り傷があった。

まだ生きているということは、気を失ってからさほど時間は経過していないらしい。

状況は。

オレは、オレ達は、一体…。

硝煙で視界は悪いが、ここは校舎の中か。

「……たしか、あの竜巻みたいなのに巻き込まれて なッ!？」

状況を確認なるべく、辺りを見渡して愕然とした。

乱立する瓦礫の山々。

リノリウムの床も、そして壁も、いたるところがひび割れ、今にも瓦解しそうに頼りない。

信じがたいことだが、あの呪詛の豪嵐はオレ達もろとも建物の半分を薙ぎ払ったらしい。

倒壊しなかったのは校舎特有の、横長の構造故だろう。

「そうだ、ユダは !」

なんとか、弾き飛ばすことはできたはずだが、校舎が半壊するほどの衝撃だ。

オレが生き残れたのは、まさしく奇跡だろう。ユダが無事であるとは限らない。

「……よかった。ご無事でしたか、ご主人」

「ユダ!」

聞き覚えのある声に安堵する。

大丈夫か、と声のする方へ駆け寄り、

「 」

安否を確かめる言葉は、形を成さなかった。

土や埃にまみれて汚れてはいるが、それでも血の一滴すら流してはいないというのに。

天使の象徴たる翼は折れ。

まるで壊れた石膏像のように。

ユダには、膝から下が“無かった”。

「申し訳ありません。

守護天使たる私が、あのような木偶に遅れをとり、拳句、ご主人を危険に晒してしまった。

ご主人のおかげで、なんとか直撃だけは避けることができましたが、あと刹那遅ければ、翼による防御も間に合わなかったでしょう

……」

血が引いていく。

ちよつと、待て。

なら、その翼の破損は。

オレのしたことは、逆に。

「いいえ、ご主人の判断は的確でした。

もし、あの場所に留まっていたら、天使といえども消滅は免れなかった。そうなれば、貴方を守ることもできなかったのですから。

……私は、守護天使失格です。最善を尽くすのなら、あらゆる事態を想定すべきだった。始めから有無を言わずヤツを行動不能にし、その後、儀式に移るべきだったのです」

ユダは俯き、下唇を噛む。

それは、傷の痛みに耐えてのものではなく、屈辱に耐えてのもののだろう。

「……後ほど、いかな叱責でも受けましょう。けれど、今は」

なにを、馬鹿な。

責める言葉などあるはずがない。

真に責められるべきなのは、他でもなくオレなのだから。

あの暴風の正体を理解していながら。

それが、天使に及ぼす影響を知らながら。

あっさりと呪いに吞まれ、ユダを助けるどころか、逆に危険に晒してしまった。

仮に、ユダ一人なら或いは、回避するすべもあつたのではないか。……いいや、違うな。天使と死神の格差は明らかなのだ。対等の条件下ならば、回避や防御に回る、という事態こそありえない。

オレは、危険を訴え。

ユダは、それ故にオレを庇い。
負わなくてもいい傷を負った。

「……まさか、対天使兵装まで持ち出してくるとは……
近隣一帯の住民から、普段は抑圧されている無意識下の負の感情
を集め、呪いにまで増幅する。」

本来、秩序を乱す天使を殲滅するために用意された、ただそれだ
けに特化したアンチプログラム。それが、あの暴風の正体です。

対峙した時点でヤツにそれ程の力は無かった。

死神がそこまでの進化を遂げてしまったのは、おそらく
そうか。」

ユダが死神との戦闘経験を記録していたように。

あの前哨戦が、死神に天使の情報を蓄積させ、進化を、促してし
まったのか。

「くそッ！」

壁を殴りつける。

なにが、助かったのは奇跡だ。

あの遮蔽物が何一つとして存在しない、だだっ広い校庭のど真ん
中で、一体どんな奇跡が起これば助かったというのか。小数点以下
にどれだけ数字を並べても、0しかない確率を可能性とは呼ばない。

オレはまた、助けられただけ。

ユダを庇おうだなんて、とんだ思い上がりだ。

あくまで、ユダは救済者であり。

どんなに足掻こうと、オレは事態に流されるだけの一被害者にす
ぎないなどと。

「……そんな事実を認めるしかないのか。」

「……おぶされ、ユダ。」

とにかく、急いでここを離れないと」

結界は依然、解かれていない。

オレの生存は、ヤツにも伝わっているはずだ。

なぜか襲ってくる気配はないが、ここに留まっていれば見つかるのは時間の問題だろう。

すぐにユダを連れて体制を立て直さなければ。

「それには及びません。」

今の私に戦闘続行は不可能。足手まといを連れてヤツから逃れることは難しいでしょう」

「そんなことは！」

ない、と言いかけて。

即座に理解してしまった。

あらゆる現実の干渉を拒絶し、先程の戦闘でさえ傷一つ負わなかった“天使”が。

土埃にまみれ。

翼を奪われ。

ましてや、肉体の一部を失う。

この、意味を。

月明かりに照らされた彼女の姿は、今にも消えてしまいそうなのに儚い。

見る。……これが、オレの命を測りにかけた、正当な代価なのだと告げるように。

潰れる。その圧力に、その重さに、耐えられない。

自分すらあやふやなオレに、他人の命を背負うことなど、できるわけもなかった。

膝をつく。

既に崩壊は始まっていた。

糸が切れた人形のように、最後の支えを失い、音を立てて崩れ落ちる。

「ご主人、気をしっかり。手順は違っていましたでしたが、覚悟を決めてください。」

この場で“接続”の儀を行い、ご主人は死神の元へ向かうべきです。

元を正せば天使と死神は同種の使命を帯びた化象。対天使兵装など使用しては摂理に反する。世界からの修正を受け、今しばらくは動くこともままならないはず。

今この時を逃せば、好機は二度と巡ってはこないでしょう」

天使と接続し、その力の一端を借り受けることで、一時的に人を超え、死神を倒す。

オレは、そのためにここにいる、はずだった。

「……ユダ、周囲に人の気配はあるか……？」

「？ いえ、ありませんが……」

「……そうか」

たしかに、ラストチャンス、だな……。

気配を消しているにせよ、息を殺しているにせよ。

ここは半壊した建物の中。加えて、これだけ視界が悪ければ、こちらの動きを正確には察知できない。

「ご主人、なにを考えているのです……」

来栖に問われた戦う理由。

その答えは、無い。

無回答こそが正解だった。

固めたはずの決意も、胸に秘めた覚悟も、前川との約束さえ、偽物の自己欺瞞。

全て嘘で塗り固められた伽藍堂。

「……もう、やめよう。」

あの呪いの中で……、自分がどんな人間なのか、よくわかった……。

前川を助けようとしたのも、君を助けようとしたのも、自分の意思でなんかじゃなかったんだ」

条件反射だったのなら、まだよかった。

「オレには！ 誰かを犠牲にしてまで生きる価値なんて、ない！」
叫ぶ。

崩れ落ちる、瓦礫を止めるすべがないように。

ユダは天使だ。

誰に知られることがなくとも、これから先も大勢の命を救うのだろつ。

前川は我が校を代表する剣道部のエースだ。

日々邁進し、やがてもつと大きな功績を残していくだろう。

けれど、オレには 何も無い。

そんな人間を生かすために、犠牲者が出るなんて、絶対に間違っている。

「だから」

「だから、なんです？ このまま死神の元へ向かい、みすみす殺される気ですか」

言葉は違えど、その意味は以前と同じもの。

『貴方は命を諦めて、死を享受する、と』

ユダの眉間は、オレに対する怒りで釣りあがっているのだろう。

焦点の定まらない眼球は、ぼんやりとリノリウムを映す。

「……きつと、それが一番正しい。今ならまだ、間に合う」

「オレが消えれば、今この瞬間も、初めから“無かったこと”になるのなら、キミも前川も助かるかもしれない」

本来、死神の標的はオレ一人。

「……ご主人、それをどこで……」

「……………」

追及を沈黙で返す。

オレ自らが、ヤツの前に出向けば、目的を達した後、結界を持続したまま再びユダを襲うとは考えにくい。

……考えにくいとか、かもしれないとか、オレはそればかりだ。

こうであつたらいいと、都合のいい理想論。

何もかも不鮮明で、その中で力のないオレには、曖昧な可能性に希望を抱くことしかできない。

それでも。

前川が来栖獲物 狩人の手にかかる前に。

ユダが死神に襲われる前に。

迅速に“オレ”を終わらせる。

「そうですか。なら、好きになさい」

「……好きになさいって」

「言っただけです。死を願う者に、救いの扉は開かないと。

生と死、相反する願いを持ちながら、それでも貴方を救うことができたのは、貴方の中でその均衡が崩れ、生きたいという気持ちが勝ったからです。

それも 今や元通り。

たとえ天使であっても、絶対的な力を持った超人であっても、救うことのできない命は存在する」

言われるまでもない。

生きてほしいという願いと。

死にたいという願いは、決して相容れることはないのだ。

故に、神の如き力を持つとも、自ら死のうとする人間だけは救うことができない。

「死にたいのでしょうか？ 見ての通り、今の私に引き止めることはできないのですから、好きにすればいい」

「……ぐ……！」

こうまで好きに言われて反論の一つもできない。

オレは今、ユダの誠意に裏切りで答え、自らに課した“二度と命を放棄しない”という誓いさえ破ろうとしているのだから。

「悔しいですか？ けれど、それも自身の感情ではないのなら無視すればいい。自ら終わりを選択できる、後悔のない素晴らしい人生ではないですか」

そう、後悔などない、はず、なのに。

知らず握り締めた拳が血を流す。

どうしてオレは、こんなにも懸命に、何かに耐えるように、憤り

を押さえ込もうとしているんだ……！

胸の中で燻っている感情が、じりじりと胸を焦がす。
死ぬのは怖い。

消えてしまうのは恐ろしい。

誰の記憶にも残らず、ここにいたという証さえ残せない。

それを口にするのはエゴなのだとわかつている。

耐える。だから、耐えるんだ。

その弱音を吐露してしまえば、オレはまた、目の前の天使（救い）
にすがってしまう。

「……はあ、どうして貴方はその頑なさを前向きに使うことができないのです。まったく、こうなれば」

と、不意に。

ユダはゆっくりと手を伸ばし。

「……ご主人」

頬に細い指が触れる。

皮膚を通して伝わる体温は彼女が生きている証明でも　　って、
近い！　顔が近い！？

吸い込まれるような白銀の瞳から目を逸らせない。
金縛りにあったように、指先一つ動かせない。

「　　ちょ、ユダ！？」

ユダの顔が近づく。

おいおいおい！

キミこそ何を考えているんだ！？

吐息がかかりそうだ。

ああ、天使も呼吸をするんだな。そりゃそうか。
って、いやいやいや！

いきなりすぎる展開に思考がついていけない。

身体は正直にも拒否しようとしなない。

はっ！？　まさか、これが映画とかでよく見る「つり橋効果」ってやつか！

「の」

の？

近づいた顔が遠のいていく。しかし、依然としてオレの頭はホルドされたまま。

「ヘタレ鶏肉野郎がッ！」

「鶏肉ってチキンッ!？」

豪快なヘッドバッド。

ごいん、といい音がした。

脳みそ揺れる揺れる。視界ブレるブレる。

……あー、ひよこがピヨピヨ鳴いているピヨー。大きくなったら君達もターキー(?)。

「……おおおおお……？」

不意打ちすぎる奇行に混乱を隠せない。

無表情のままだったから、次の行動を予測できなかった。いや、予測できても逃げ場がなかったんだが。

「ふう」

ユダは気が済んだ、と手を放す。

その澄まし顔を見て、我に返った。

「……ってえな！ なにしゃがる!!」

このシリアスブレイカーが！

「目は覚めましたか」

「……え」

「あまりにつまらない御託をごちゃごちゃとぬかすものですから、一発キツイお灸が必要かと思ひまして」

いや、それにしたってヘッドバッドはないだろう。せめて、ピンタとか。

「いいですか、ご主人」

再び、ユダの両手が頬に触れる。

掴むのではなく、壊れてしまわないよう、そっと包み込むように。「正しい道だけを歩める者など、いません。」

誰もが明日への不安を抱きながら、手探りで正しいと信じた答えを選んでいく。

何度間違えたっていいではありませんか。時には立ち止まったっていい。

自分が“無い”のなら、探せばいい。

間違いだと気づいたのなら、やりなおせばいい。

自分が許せないのなら、変わっていけばいいのです。

今こうして、貴方は生きているのですから」

荒野の中、地図はなくとも、時間と可能性は膨大にある。なら。

何度だってやり直せる。

ここは極地ではないのだと、言葉よりもその瞳が強く訴える。

「決してしてはならないのは、歩こうと、少しでも前へ進もうとする意志を捨ててしまうこと」

一歩踏み出すことを恐れて、立ち止まったままだったのは弱くてずるい自分自身。

とうに見慣れた灰色の景色。

今日より明日へ。

時にはつまずいてしまうことがあったとしても。

それでも前へ。

より良い自分になるために。

「あ」

停止していた錆びついたエンジンに火が点る。

身体の隅々、指先に至るまで血が巡っていくのを感じる。

無限に明日が続くのは地獄だと思っていた。

新見望を動かす燃料は、くだらない教科書通りの普遍性なのだと悟った気になっていた。

けれど、それだけでは、なかったんだ。

「タロットカードにおいて、死神は十三番目の大アルカナとして描かれています。その正位置が示すのは未来に待ち受ける“死”、ま

たは“破滅”。

けれど、逆位置が示すのは“死からの再生”。すなわち、やり直し、です。

貴方が真に自身の変革を望むのならば、ヤツを地に落とし、新たな自分へと生まれ変わらなさい」

『キミが本当は何のために 』

あの言葉の、真の意味を理解する。

「ユダ ごめん。オレは、キミのためには、戦えない……」
「はい」

命を救われておきながら、その恩情に報いることもできない。結局、それが言い訳なのだと気付いてしまったが故に。

誰かのためじゃない。

今の新見望を維持するためでもない。

オレは

「……オレは、明日の自分^{あす}のために、戦う」
死神が見えたのは必然だった。

“死”無くして“新生”はありえない。

だから、死ぬのは当たり前のこと。

オレはここで死ぬ。

そして、生まれ変わるんだ。

「儀式を。」

オレに死神を倒す力を貸してくれ」

どれだけ自分勝手な物言いなのかを理解した上でなお、願わくばそれが、オレが彼女のためにできる唯一の選択でもあるのだと信じる他ない。

「その言葉に、偽りはありませんね」

「ああ」

「結構です。では、儀に移ります。

そこに座って、禅を、組んでください」

安堵からか、ユダの息は荒い。

張り詰めた糸が緩んでしまわないように、オレには共感すらできない苦痛を堪えて、肩で息をしている。

「ユダ！」

「……大丈夫です。

目を瞑って。心を落ち着けて」

「……っ、……わかった」

心配を心の奥へ押し込め、指示に従い、禅を組む。

それが、彼女の覚悟に対するせめてもの誠意であると信じている。深呼吸をして、雑念を排除する。

意識は深く深く、ただ目前の闇にのみ向ける。

「……確認になりますが、私から流れ込む神性は、ご主人にとって猛毒ではない。

失敗はご主人の死、……いいえ、消滅を意味し、魂は輪廻の輪をくぐることなく肉体同様、無に還る。

はつきり言ってしまうえば成功の可能性など無に等しい。

……全力でバックアップはしますが、最後はやはり、あなた自身の強さに賭けるしかない。それでも」

「やってくれ、ユダ」

何も成せず。

未来に希望を持たず。

意味もなく、繰り返すだけの毎日。

ただ、全てを諦めて枯渴しきっていた。

……無力だった、人生。

今もなお、その葛藤は終わってはいない。

なら、その壁を壊すのは。

変わるなら、今しかない。

オレは、強くなりたい。

叶うのならば、誰かのために。

そして、なにより、オレ自身のために。

ほんの少しでいい。

自分を誇れるように。

「その思いを、どうか最後まで無くさないで。毒を薬に反転させるには生きようとする意志が不可欠。より良い未来を描く、それが希望。」

明日を想わない者に奇跡は掴めないのですから。

……最後に、いえ、違いますね。一言だけ。

貴方は十分に強い。あとは、少しだけご自身を信じてあげるだけでいいのです。

長くなりましたね。

では、始めます」

それは音ならざる聖歌だった。

五感はなにも捉えない。

ただ、意味だけが、頭に浸透していく。

『共鳴し、共感し、我らが全てを共有せよ。

我はそなたの光。我は生きとし生けるものの光。

黒白は対にして同一。

願わくば、この歌が。

貴方への福音でありますように。

ここに、天を紐解く式となし、始まりの園^{エデン}への扉を開く』

故に、其の名を、

『天解式』

貴方が手にするのは、禁断の果実。

善悪の知恵の樹よりこぼれ落ちる、天使を人へと貶め、そして、人を天へと押し上げる唯一の接点。

これは、許されざる禁忌の力。

けれど、貴方ならば、生きる苦しみを見据えることができたのなら、それを正しく行使できると信じています

そして、ワタシは、ワタシを失った。

無限に広がる白。

距離はどこまでも曖昧。

果て無き荒野のようであり。

箱庭のようでもある。

距離も、時間も、なにもかもが無限。

穢れなき原初の檻。

これこそ、遙か古より人類が理想郷とする楽園、エデンの園。

“無”だけを内包した浄化された世界。

唯一にして絶対の解答。

世界の答え。

「
」

白く白く、ただ白く。

聖域は永劫の白を刻む。

自我を認識できない。

五感から個人としての情報にいたるまで、悉くを略奪される。

ここでは人間性など禁忌以外のなにものでもないのだから。

一秒前の記憶など遠い過去のよう。

意味を失った現象はただの言葉に成り下がり、その言葉さえ意義を失い、無に還る。

海へ沈んでいくように、深く、ゆっくりと白へ落ちてゆく。

その中で。

既に機能しない頭で漠然と、この世界はいつかの“誰か”そのものののだと理解した。

迷える魂よ。その心ごと原初へと還りなさい

溶ける。融ける。熔ける。

ああ、なんて 空が、遠い。

『ご主人、自我を保って！ その言葉を聞いてはなりません！ 貴方は“無”ではない！ 自分の名前を思い出して！』

ワタシの、名前：？

『新見望！！』

遠く、しかし確かに響く美しい音色。

その声を、ワタシは確かに覚えている。

差し伸べられた手を握り返す。

瞬間、硝子細工の理想郷はひび割れ、音も無く瓦解した。
それは、夢から醒める刹那に似ていた。

世界は瞬く間に汚物にまみれ、存在の権利を取り戻す。
本来の在るべきカタチを再構築する。

「さあ、帰りましょう。貴方の生きる世界へ」

混沌に満ちた、全てが有限で、終わりを孕む世界へ。

「」

それを、尊いと。

楽園は地獄と同意であり、完全などあってはならない幻想なのだ。
と。

いつかの“誰か”は嘆いた。

『だって、醜くとも、愚かだったとしても、世界はこんなにも
美しいでしょう』

そして

最後の一瞬、在りし日の、遠い望郷を見た。

「ご主人！ 目を開けてください！ ご主人」

「……あ」

「私が、誰かわかりますか」

「……ユ、ダ……？」

「はい。……よかった、どうやらご無事の様子ですね」

「……そうみたいです」

ユダは胸を撫で下ろす。

あまり感情をあらわにすることを良しとしない、彼女が見せる安堵は、それだけ事態が深刻だったということだろう。

けれどオレには、つい今際の出来事のはずなのに、実感はおろかなに起こったのかさえ何一つとして思い出すことができない。

時間にしてほんの数秒たらずなのに、まるでフィルムのコマ送りで時間が短縮されたようにすら感じる。

「それでいいのです。夢は、記憶には留まらないもの。大切なのは今を生きることです」

その表情に変化はない。

だからきつと、それが哀愁を帯びたものに見えたのは、オレの勘違いなのだろう。

「　　つて、あれ？」

頬には一筋の涙の跡があった。

「わ、悪いっ」

咄嗟に拭おうとして、感じていた違和感の正体に気づいた。

見れば、左腕の肘から先にかけてタトゥーのような、翼を模した紋様があった。

それが今もなお、熱を放ち続けている。

この刻印が天使との接続の証、なのだろうか。

間違いなく、自分の左腕であるはずなのに、どこか他人のもののようにも感じる。

細部まで精密に動かすことができるのに、感覚はひどく曖昧。

「いいえ。一番の山場は越えましたが、それはまだご主人自身の扉を開いたにすぎない。

接続は、むしろここから。

さあ、これで最後の仕上げです。ご主人、手を」

「ああ……」

この場合の手は、言うまでも無く左腕のことだろう。

言われるまま、腕を差し出す。

その手のひらが、そっと包まれる。

「記憶同化、全回線閉鎖。

神経伝達、確認。

擬似神経の生成は問題なく動作中。レート数値はミニマム。身体への負担を抑えることを最優先。

……正常」

「ご、……ふ」

口内に鉄の味が広がる。

血管の中を見えない蛇が暴れ狂い、毒牙で神経をズタズタに引き裂いていく。

錯覚じゃない。

……魂が、ブレる。

「……っ、辛いでしょうが耐えてください。すぐに終わらせます」

「……大丈夫。……大丈夫だ……」

……これでいい。

ありえない奇跡には相応の代価を。

オレの命と、この痛みこそ、その代価だ。

「思考同調、開始。

今より0020以降は回路切断。

……正常」

魂が他者に侵食される悪寒と、体内に異物が混入する激痛に歯を食いしばって耐える。

「経験変換、開始。

マイナス0930より、時間軸を現在へ固定。

……正常。

逆流、無し。

システム、全て正常。

機工憑依、展開」

放たれる光が目を眩ませる。

「……際どかったですが、上手くいったようですね」

柔らかい口調が儀式の成功を告げる。

ゆつくりと開いた瞳が映したものは、白銀の手甲に覆われた左腕。天使の証なのか、あまりにも小さく機能を成さない機械の片翼がついている。

「……これが」

「機工憑依。化象と契約、接続しその能力の一端を武装化したもの。肉体の変化は力の度合いを表す。肘から先では、再現可能なのはよくて2割、状況によってはそれ以下が限界でしょうが、それでも

」

「ああ。アイツを倒すには十分だ。……でも、このままじゃ武器が無い」

見た感じ、それらしいものは見当たらない。

手甲に覆われた左腕以外は人間のまま。大鎌相手に素手では分が悪い。

ユダのように、無から武器を創り出すような真似もできそうにない。

「心配には及びません。」

今のご主人は、人間であると同時に天使でもある。指を動かすことに疑問を持たないように。ただ、“戦う”と思えば、それだけで武器は成る」

「……疑問を持たず、ただ、戦う」

月明かりが収束し、おれに呼応するように片翼が、その形状を変化させる。

一枚の羽が開き、その内部から光の柄が現れた。

掴み、引き抜くと、剣のシルエットが顕わになる。

ユダの武装が実態を持った弓剣だったのに対し、手にしたものはシルエットのみを映す一本の刀。

「……刀、ですか。本来は西洋の刀剣を模した形状となるはずですが、おそらくご主人の剣に対するイメージが色濃く反映されたのでしょうね」

「なるほどな」

これが、光の化身たる天使の特性。
周囲に存在する、光源を圧縮、形状を制御することで、自らの衣装に変える。

試してみないとわからないが、おそらくは剣を盾に変えて身を守る等の応用は可能かもしれない。

経験などあるはずもなく、理由もない。にも関わらず、天使の能力に纏わる全てを、我がことのように認識できる。

「……そうか……！」

これは、能力というよりも、むしろ。

「そう、あなた方人間で言えば、生態、といったところでしょうか」
「呼吸、みたいなもんか。理屈はあっても、疑問を挟む余地はない。始めから、そうであるように、できている。」

ユダは頷いた。

その時、

みしり、と空気が軋みをあげた。

「「ッ」」

校庭に意識を向けると、どす黒い塊が蠢動を始めているのが伝わってくる。

「ご主人！」

「わかってる。死神が動き出したみたいだな」

「間もなく、ここをつきとめる。場所を移すのでしたら、お早く。
左腕の変化に合わせて、ある程度身体機能は向上してはいますが、決して無理はなさらないください。死んでしまえば、……本当に死んでしまえば、それで終わりだということを忘れないで」
「わかってる！」

首を飛ばされたら死ぬし、心臓を貫かれても死ぬ。

半端に天使化していても、^{ベース}基盤は人間。化象と異なり、死の概念を克服したわけではない。

校庭に出ようと瓦礫に足をかける。

「ご主人！」

呼び止める声に、振り返る。

「結論から言つて」

と、お決まりの出だし文句でユダは始めた。

「今のご主人は、チートを使った勇者です」

「……………はい？」

これからという時に、いきなり何を言い出すのか、この天使は。

「いえ、私の最大の魅せ場は終わりなわけですし、ある程度のメタ発言は許されるかな、と」

「許されねえよ！　むしろ、オレが許さねえよ！！　二度目の台無しだよー！！！」

「つまり」

渾身のツツコミ、スルー。

「万が一、あのようなガイコツ兵に敗北を喫した場合には貴方を、このゆ〇り世代が！　と罵倒せざるを得ません」

「……………」

……………それは、いいけどさあ。

コイツの年齢は不明だが、ゆり世代って差別用語じゃねえの。天使が使つていい単語なのかよ。

「勝つて当然なのです。冒頭のイベント戦闘です。システムの負ける方が難しいのです。ですので、負けたら怒ります。ええ、すごく怒りますとも」

「それは怖いな」

何故に、そんなにRPGに精通しているんだよ、というツツコミを飲み込んで、苦笑いで返す。

「そうですね。負けたら罰ゲームです」

「……………ば、罰ゲーム？」

「ええ、天罰をくだします。天使的に。

そうですね、光の矢でここいら一帯をご主人もろとも、火の海にしましうか」

「怖すぎるわ！」

仮にも天使が、無実の人間を人質にとんな！

今更ながら、コイツ本当に天使か！？

……ああ、なんかゲシユタルト崩壊してきた。天使ってなんだっけ？

「あら、無実の人間など赤ん坊以外、いはしませんよ」

ふふ、と勝ち誇ったように笑うユダ。

うつむ。

人の揚げ足取りが好きなのやつだ。ああ言えばこう言う。

まあ、その笑みを見て、緊張がほぐれた手前、文句は胸にしまっておこう。

けど、もう少し人間の善性を信じてあげて。

「……負けたら、許しませんからね」

ふう、と大げさに溜息をついて。

「……ああ、わかった。わかったから、そこで安心して休んでろ。すぐに迎えに来る」

そう言っつて、瓦礫にかけたままだった足に力を籠めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5522o/>

Re:Angel / Machinery feather

2010年12月17日07時40分発行